

第9回人文・社会科学系研究推進フォーラム報告書



人社系研究のコアバリューを引き出す研究支援のあり方とは

第9回人文・社会科学系研究推進フォーラム

JINSHA kaleidoscope

人社系研究のコアバリューを引き出す
研究支援のあり方とは

第一部(2024年3月7日)目次

- p.1 開会挨拶 齊藤 延人／東京大学 理事・副学長
- p.3 文部科学省からの話題提供
高田 安隆／文部科学省研究振興局振興企画課 学術企画室長補佐
- p.10 人社系研究のコアバリューを引き出すファンディングのあり方とは
—RISTEX の経験から
小宮 泉／JST-RISTEX 企画運営室 企画・SIP グループ 副調査役
- p.23 人社系研究を伴走支援するアカデミック・インキュベーション
岡田 弘太郎／一般社団法人デサイロ 代表理事
柳澤 田実／関西学院大学神学部 准教授
- p.38 社会に価値をもたらす知 産学官連携から考える人社系研究
南 了太／京都精華大学国際文化学部 准教授
- p.55 人社系研究のコアバリューとは 一対話の場から見えるもの
齋藤 希史／東京大学大学院人文社会科系研究科 教授
東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター長
- p.69 パネルディスカッション
モデレーター：西村 勇哉／株式会社エッセンス 代表取締役
NPO 法人ミラック代表理事
- p.87 閉会挨拶 大橋 弘／東京大学副学長

開会挨拶

齊藤 延人／東京大学 理事・副学長

第9回人文・社会科学系研究推進フォーラムの開催に当たり、主催させていただき東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室を代表し、ご挨拶させていただきます。

皆さま本日は本フォーラムにご参加いただき誠にありがとうございます。またこの後ご登壇いただく文部科学省の高田安隆さま、JST 小宮泉さま、一般社団法人デサイロ、岡田弘太郎さま、関西学院大学、柳澤田実先生、京都精華大学、南了太先生、ヒューマニティーズセンター、齋藤希史先生、株式会社エッセンス、西村勇哉さま、本日はお忙しいところご参加をいただき誠にありがとうございます。この場をお借りして御礼を述べさせていただきます。

人文・社会科学系研究推進フォーラムは、URA、研究者、事務職員、府省資金配分機関担当者などが、ともに人文・社会科学系分野のよりよい研究推進の在り方を議論する場として、2014年より開催されています。フォーラムの企画運営は、各大学の人社系担当 URA の有志グループによって行われています。9回目となる今回は「JINSHA kaleidoscope 人社系研究のコアバリューを引き出す研究支援のあり方とは」と題しています。Kaleidoscope、つまり万華鏡という言葉には、さながら万華鏡で見るように、さまざまな形で輝く人文・社会科学系研究の価値への思いが込められています。

人文・社会科学系研究のコアバリューとは何かというのは、一朝一夕には答えの出せない問いではありますが、研究者によって生み出された知がアカデミアを超えて、社会との接点を持つ中で、新たな価値が見いだされ、それがまたある種のコアバリューを形成していくこともあるでしょう。

本日は研究資金配分機関と社会、そしてアカデミアと異なる立場から、

それぞれの接点での取り組みや考察などについてお話しいただきます。人文・社会科学系研究のコアバリューを引き出すアプローチにはどのようなものがあるか、参加者の皆さまとともに議論を深める機会になることを期待し、開催の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

文部科学省からの話題提供

高田 安隆／文部科学省研究振興局振興企画課 学術企画室長補佐

ただいまご紹介いただきました、文部科学省研究振興局学術企画室の高田と申します。本日はこのような機会をいただきまして誠にありがとうございます。それでは早速ですが、私のほうから人文学・社会科学の振興施策についてご説明をさせていただければと思います。

資料の文字が小さくて大変恐縮ですが、こちらのスライドは昨年の8月に文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会人文学・社会科学特別委員会で、人社の振興に向けた当面の施策の方向性として取りまとめたものの概要になります。これまでの主な施策等について進捗状況や課題を確認し、その上で当面の施策の展開や、さらなる検討課題についてまとめたものです。

人文学・社会科学の振興に向けた当面の施策の方向性について
(令和5年8月30日 科学技術・学術審議会学術分科会人文学・社会科学特別委員会)


○ 基本的な方針

「第6期科学技術イノベーション基本計画」「骨太の方針2023」「統合イノベーション戦略2023」等を踏まえ、以下の取組を推進

- 1 人文学・社会科学が主体となった共同型研究を行う、学術知の共創と総合知の創出に資する取組の推進
- 2 良質な学術データの整備による最先端のデータ駆動型研究、AI駆動型研究の実施など、人文学・社会科学における研究DXの推進
- 3 人文学・社会科学の総合的・計画的な振興に向けたモニタリング指標の開発とモニタリングの実施

○ 方針に係る取組の進捗状況

- 1 人文学・社会科学が主体の「共創型」プロジェクト研究の推進
 - 研究課題づくりやチームづくりに向けた共創の場の整備(文部科学省モデル事業)
 - 日本学術振興会(JSPS)による学術知創出に向けた共同研究プログラムの推進
- 2 研究DXに向けた基礎開発・整備
 - JSPS「人文学・社会科学総合データカタログ」(メタデータプラットフォーム)の整備
 - 人間文化研究機構「NihūBridge」(人文系学術資源のポータルサイト)の運用
 - 国文学研究資料館による古典籍30万点の画像化(「国書データベース」)など、データ化・データ利活用に係る学術機関の先進的取組の推進
- 3 我が国の人文学・社会科学の研究動向に係るモニタリングの開発
 - 本委員会において「人文学・社会科学の研究成果のモニタリング指標について」(R5.2)を取りまとめ、国際ジャーナル論文、国内ジャーナル論文等を対象としたモニタリング実施や書籍に係るモニタリング指標の開発等を提言



○ 課題及び今後の取組

- 1 人文学・社会科学が主体の「共創型」プロジェクト研究の推進
 - 共創の場の整備にあたり、共同研究のチームマネジメント方法、マネジメント人材の確保、研究者のマッチングなどに課題。人文学・社会科学の学術的進展・総合知の創出に向けた、共創型プロジェクト研究の更なる推進に向けて、モデル事業の検証を進める。併せて、プロジェクト型研究の成果の把握や可視化について検討を進める
 - JSPSによる共同研究プログラムを引き続き推進。人文学・社会科学は、意味や世界を探究する学問であり、実社会との関わりを有する、本来的に実践的な性格をもつもの。今後、グローバル・イシューと日本社会、AIと人類・社会など、現代的課題に係る研究の推進にも期待
- 2 研究DXに向けた基礎開発・整備
 - JSPSにおける人文学・社会科学系のメタデータに係るデータカタログの整備は社会科学を中心に進展。更なる分野の拡充や利活用の促進が必要
 - 人文学系学術資源のデータ化にあたっては、多様な資料特性を踏まえたデータ規格の整理・調整や、データ構築・データ利活用に向けた人材確保が課題。国際的に人文学研究のデジタル化(デジタル・ヒューマニティーズ)が進展する中、先導的な取組を推進するとともに、関係機関による協働体制を構築してデータ規格等の基礎開発、データ構築等に進じた研究者の育成が必要
- 3 我が国の人文学・社会科学の研究動向に係るモニタリング指標の開発
 - 人文学・社会科学の研究成果として大きな役割を果たす「書籍」や社会的コンテキストに関する指標等について開発を進める

※ 共創型プロジェクト研究の更なる推進方策、データ基盤を支える人材の育成やデータ利活用の促進、研究成果の可視化や国際発信力の強化等の観点について引き続き検討

学などの多様な分野の研究者や、多様なステークホルダーが参加して、人に固有の本質的で根源的な問いを追求する研究を推進する競争的研究費事業になっています。令和6年度は、JSPSの運営費交付金の推計額ですが、1.5億円となっております。

左下の「②人文学・社会科学データフラストラクチャー強化事業」もJSPSの事業です。人社分野の研究データを共有・利活用するためのデータプラットフォーム JDCat を運用して充実強化を図るという事業です。こちら0.8億という令和6年度予算案になっています。

右下の部分は、大学共同利用機関法人の人間文化研究機構の研究の取り組みや、国の大規模フロンティア促進事業の一環として、国文学研究資料館で行われている、古典籍を画像データ化したりテキストデータ化したりということで基盤を整備し、それらを活用して共同研究を推進していく事業となっております。

下の真ん中ですが、令和6年度からの文部科学省の新規委託事業ですが、今日は特にこちらの情報提供をさせていただければと思っております。具体的には次のページになります。

「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業」ということで、令和6年度からの3年間の事業となりますが、令和6年度の予算規模は1億円となっております。この事業は2つの柱からなっており、1つ目がデジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムの運営となります。

諸外国では人文学研究のデジタル化、いわゆるデジタル・ヒューマニティーズが積極的に推進されている中で、わが国でも研究の効率化や加速化、それから深化に向けてDX化を進めていこうというもので、この事業を立ち上げているものでございます。

人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業

令和6年度予算案（案）

1億円
（新規）



概要・課題

- 良質な学術データの開発・整備やネットワーク化、大量のデータを利用した研究の効率化・加速化や巨視的研究の実施、市民等のデータ利活用促進など、諸外国は人文学研究のデジタル化を積極的に推進。「デジタル・ヒューマニティーズ（DH）」と称する世界的動向への対応や総合的な創出に資する観点から、国内の学術機関の協働体制を構築し、分野に適したデータ規格のモデルガイドラインや人材育成プログラムの開発など、DX化のための基礎開発が必要。
- 総合的・計画的な人文学・社会科学の振興に向けて、我が国全体の人文学・社会科学の研究動向や研究成果を把握するためのモニタリング手法の確立が喫緊の課題。研究成果の主な発表媒体として、個人の研究成果を体系化した「書籍」が重要な位置を占めており、論文データだけでなく、書籍データを活用した研究動向や成果の調査・分析が必要。加えて、社会・経済・文化等に中長期的・多面的に生じる人文学・社会科学の多様な社会的インパクトやSNS等を活用した成果発信等に係る指標についても検討が必要。

事業の概要

（事業期間：令和6年度～令和8年度）

【事業の目的】 我が国の人文諸分野の研究DXを推進するため、国内学術機関で構成する「デジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアム」を立ち上げ、協働体制を構築して、データ基盤の開発を推進する。併せて、我が国の人文学・社会科学の研究活動の成果をデータ分析により可視化・発信するための研究開発を実施する。

I. データ基盤の開発に向けたデジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムの運営

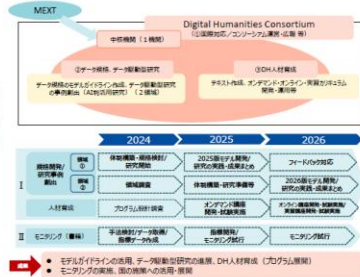
※ 国内諸機関で協働体制を構築し、国際対応や連絡調整会議の運営、以下の取組等を実施

- ① 人文諸分野のデータに係る国際規格対応
- ② 人文諸分野のデータ規格のモデルガイドライン策定、データ駆動型研究の事例創出
- ③ 若手研究者等を対象とした、人文諸分野の特性に応じたデータ構築・AI利活用研究等に関する人材育成プログラムの開発・実証

➤ 国内5中核機関に委託（1機関-640万円）



データ規格の統一による読者調査結果



II. 人文学・社会科学研究におけるデータ分析による成果の可視化に向けた研究開発

※ モニタリング指標の開発に向けた調査・分析

- ① 「書籍」に係る研究成果を可視化する指標の開発に向けた調査・分析
- ② 多様な社会的インパクト、SNS等の「Altmetrics」リ、データベース構築等の研究基盤整備への貢献等の新たな指標の検討
- ③ 国際発信に係る指標の検討や諸外国との研究動向比較

➤ 国内5大学、大学共同利用機関法人、独立行政法人等に委託（1機関-320万円）

- 第6期科学技術・イノベーション基本計画（令和3年3月26日閣議決定）：「人文学・社会科学の振興の促進」の目標を踏まえ、自然科学の「記述の統合による、人類社会の総合的理解と課題解決に資する『総合知』の創出に活用が期待される」
- 「人文学・社会科学等総合知創出」に関する取組について2022年度までに検討を行い、2023年度以降はモニタリングを実施する
- 「研究開発推進と改革の本質的変革2023」（令和5年6月16日閣議決定）：「『書』のデジタル化推進（『書』）を数値化し、『書』の活用を促進する。『書』の活用を促進する。『書』の活用を促進する。『書』の活用を促進する。」
- 「統計イノベーション戦略2023」（令和5年6月9日閣議決定）：「『人文学・社会科学も高度化・発展の促進』【研究データの活用促進】『研究データの活用促進』を推進する。『研究データの活用促進』を推進する。『研究データの活用促進』を推進する。」

（担当：研究振興局企画課）

4

具体的には、国内の学術機関で構成されるコンソーシアムを構築し、1つ目としては、わが国的人文系データ規格のモデルガイドラインを策定すると。そして、そのモデルガイドラインを活用したデータ利活用研究のユースケースの創出を行っていくというものになります。2 領域について実施することを想定しております。ちょうど一昨日人文学・社会科学特別委員会がございましたが、この2 領域については文字資料それから地誌類関係資料ということで議論がなされていまして。

2つ目としては、この2 領域の学術資料について、IIIF（トリプルアイエフ）のようなデータの国際標準規格への対応ということで、そうしたものの働きかけを想定しておりますが、相互運用性の調整も図っていかねばと考えております。

3つ目としては、人文系の若手研究者等を対象にして、人文系資料のデータ構築や、データ利活用研究に通じた人材育成プログラムを開発実施し

ていければと考えております。

そして、作成されたデータ規格のモデルガイドラインや教育プログラムといった成果を、国内の関係機関や研究者の方々に対して、普及・啓発していければと考えております。なるべく早めに委託の公募をさせていただければと考えております。

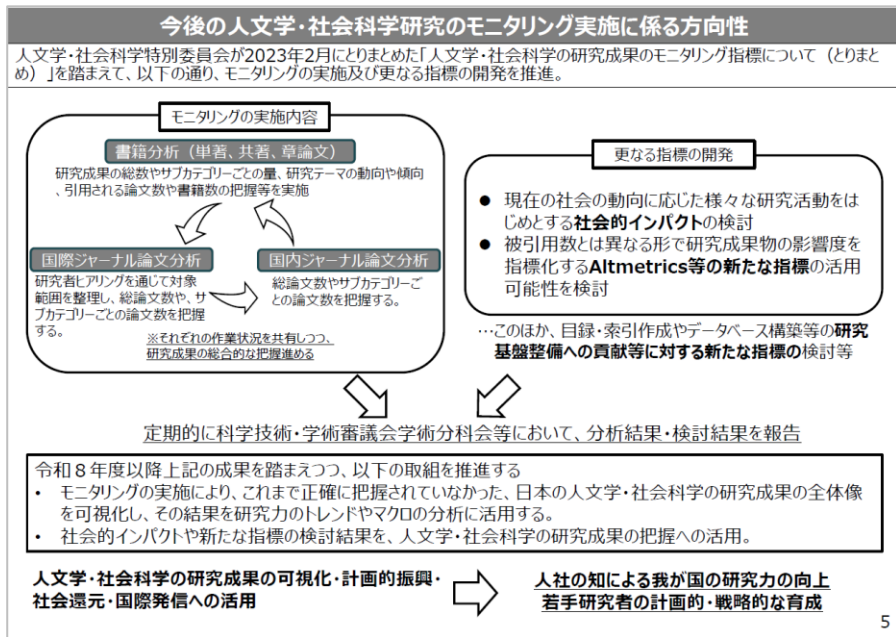
文科省から委託ということになりますので、受託していただく機関—コンソーシアムの中では中核機関と位置付けておりますが—、中核機関にはコンソーシアムの取りまとめをお願いできればと考えております。

2 つ目でございますけれども、モニタリング指標の開発に向けた調査分析というものになります。これは第6期の科学技術・イノベーション基本計画において、「今後のわが国の総合的、計画的な人文学・社会科学の振興に向けては、わが国全体の人社の研究成果を把握するためにモニタリング手法の確立が必要」と指摘されていることを踏まえ、人文学・社会科学特別委員会で昨年2月、モニタリングが必要な成果発表媒体として、国際ジャーナル論文、国内ジャーナル論文、書籍、プレプリントの4つが挙げられたところです。これを受け、この事業では、特に書籍について研究成果を可視化するための指標の開発に向けた調査分析を、文科省からの委託によって行っていきたいと考えています。

ご承知のとおり、わが国の人社分野においては、書籍は個人の研究成果を体系化する重要なものである一方で、現在、研究成果としての書籍をモニタリングする手法が確立されていないため、ぜひ書籍のモニタリング指標の開発に向けた調査分析を、この事業で進めていきたいと考えているところです。こちらなるべく早く委託の公募を開始できればと考えております。

最後のページですが、今後のわが国の人文学・社会科学のモニタリングの方向性ということで、先ほども申し上げましたとおり、モニタリングの

対象の研究成果の発表媒体としましては、書籍の他に国際ジャーナル論文、国内ジャーナル論文も掲げられておりますので、これらについても別事業で対応していく予定としております。



具体的には、研究者と行政官が同じ課題認識の下で協力して取り組む SciREX 共進化実現プログラムというものが省内にあります。そこで採択され、昨年10月から国際ジャーナル論文と国内ジャーナル論文の定量的な指標の構築の可能性について、フィージビリティの検討・調査・分析を進めております。先ほどの書籍の部分と国際ジャーナル論文、国内ジャーナル論文を合わせまして、わが国の人社の研究成果や研究動向について総合的な把握を進めていきたいと考えております。

右上の人社の研究成果の、社会的インパクト等を図る新たな指標の開発の可能性についても、先ほどの新規事業のほうで併せて検討を進めていけたらと考えております。

ということで先ほどの新規事業ですが、こうしたわが国の人社の研究力を可視化していく重要な取り組みとなりますので、公募要領が今後公開されましたらぜひ積極的にご検討のほうをいただければ幸いです。

最後に[参考資料](#)を一つ付けさせていただいております。こちらは一昨日の人文科学・社会科学特別委員会において議論されました、「これまでの主な意見の論点整理」というものでございまして、つらつら書かれておりますけれども、既に文部科学省のホームページのほうに載っておりますので、皆さまにおかれましてはぜひお時間のある時にご参考までにご覧いただければ幸いです。

「人社系研究のコアバリューを引き出すファンディングのあり方とは」 —RISTEX の経験から

小宮 泉/JST-RISTEX 企画運営室 企画・SIP グループ 副調査役

「人社系研究のコアバリューを引き出すファンディングのあり方とは」という非常に大きな問いを頂きまして、自分が何を話せるかなと心配なのですが、業務経験の中から少し関連することを話題提供させていただければと思います。

まず科学技術振興機構、JST です。今日ご参加の皆さま、ご存じの方も多いかもかもしれません。文部科学省の傘下の独立行政法人でございます。科学技術・イノベーション基本政策を踏まえ、実行の部分を担当しているいろいろなことをやっておりますが、いわゆるファンディングという大学や産業界の研究者の方々に資金をお渡しして、研究推進をサポートさせていただく業務がメインになっています。

JST の中にある社会技術研究開発センター、RISTEX という組織は、最先端の科学技術研究ではなくて、その成果も活用して社会に還元していく、科学と社会の接点の活動をしております。社会の具体的な問題の解決と社会技術の ELSI、倫理的・法的・社会的課題を 2 本柱として、こういった取り組みを通じて新しい社会的・公共的価値を創り出すということを目指しています。そのために新たな社会システムを構築することをミッションにしています。

沿革です。1999 年のブダペスト宣言で、21 世紀の科学に求められる新たな役割ということで、知識のための科学だけではなく、「社会における科学と社会のための科学」が提唱され、それを受けてわが国としてこれをどのように具現化していったらよいか、当時、日本学術会議会長の吉川先生を座長にした研究会が科学技術庁に立ち上がりました。そこでの議論を踏まえて 2001 年に RISTEX の前身が設立されたという流れになります。

社会技術研究開発センター(RISTEX)

Research Institute of Science and Technology for Society

- 社会の具体的な問題の解決、科学技術の倫理的・法的・社会的問題(ELSI)への対応を通じて、新しい社会的・公共的価値および経済的価値を創り出すことを目指す。
- 自然科学と人文・社会科学の複数領域の知見を統合して新たな社会システムを構築する。

沿革

- 1999年 「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言(ブダペスト宣言)」
社会における科学と社会のための科学(Science in/for Society)
- 2000年 科学技術庁「社会技術の研究開発の進め方に関する研究会」設置
(座長: 吉川弘之・日本学術会議会長<当時>)
- 2001年 RISTEX(前身)の創設

3

社会技術研究開発センターという名称に含まれている「社会技術」とは何だろうということなのですが、ちょうど2年ぐらい前に吉川先生にインタビューさせていただく機会があり、そこで吉川先生が社会技術には二つの捉え方があるのだとおっしゃっていました。一つは社会問題というものがあって、それに対応するためにあらゆる知を総動員するという考え方。もう一つは、まず学問というところに着目して、その知をユースするという考え方。後者が赤字で記載されている部分です。「社会科学で解明されているさまざまなことを社会に応用して問題解決に使用したり、政策をより合理的にする」技術もあるはずで、それが社会技術であると。学術の在り方を変えたいというメッセージを込めたとおっしゃっていました。

今回いただいたお題の、「人社系研究のコアバリューを引き出すファンディングのあり方とは」と紐付けて考えると、社会技術のファンディングというのは人社系研究のコアバリューを引き出すファンディングという見方

もできるのかなと思った次第です。

「社会技術」の1つの捉え方

「学術を営む基礎研究者が研究成果を社会問題の解決に使用 (use) するということを考えた。自然科学には、それを使用した「技術」がありその学問がある。

ならば、**社会科学で解明されているさまざまなことを社会に応用して問題解決に使用したり、政策をより合理的にする**、そういう技術もあるはず。それこそが「社会技術」である」

吉川弘之先生インタビュー「RISTEXのこれまで、いま、これから(2022年3月発行)」より



吉川弘之先生

社会技術のファンディング

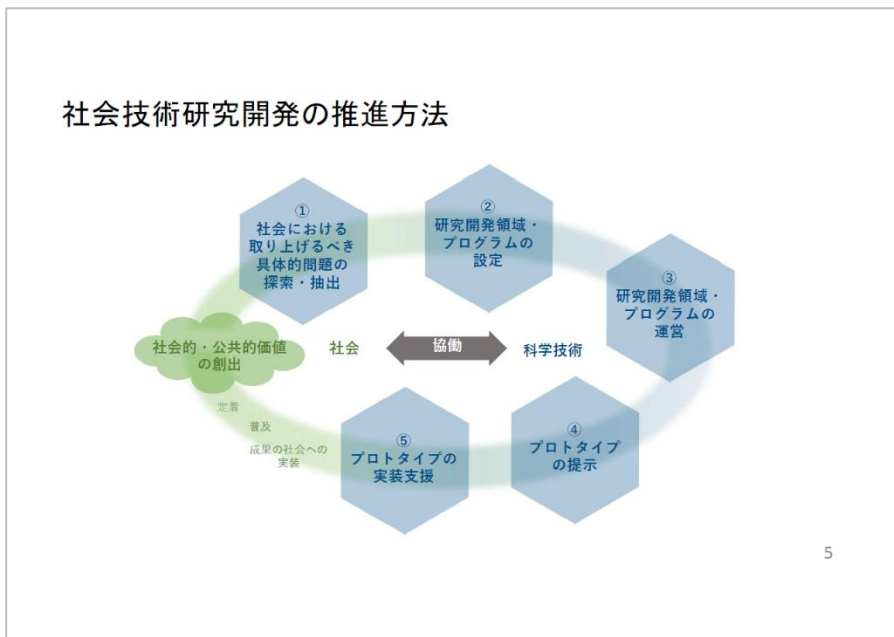


人社系研究のコアバリューを引き出すファンディング

4

社会技術研究開発の推進方法ということで、5つのステップを RISTEX の活動として位置付けています。①、②は研究開発の前段階、デザインの段階です。①で社会においてどんな問題があるのかを探索・抽出する。それを踏まえて②のところで、研究開発領域のスキームに落とし込んでいく。③で実際に領域を立ち上げて、研究開発を推進していく。そして④、⑤はアウトプットで、プロトタイプの提示、実装支援を行う。ここで言うプロトタイプというのを少し補足したいのですが、社会技術研究開発は、研究成果を社会に実装することを強く意識した研究開発です。ただし、社会実装そのものを本格的に進めようとする、やはり企業や NPO など社会側のアクターでないとできないことだと思っており、我々がその一歩手前の「試作」をする、プロトタイプをつくることを研究開発としてやると。またそのプロトタイプが社会に実装されるためのいろいろな仕掛けを研究

開発の段階からつくっておく。そういったことを意識しております。



個別の取り組みを簡単ですがご紹介します。

一つ目、先ほどの5つのステップのと①、②のデザインの部分です。特徴的なのは、社会の問題を俯瞰するための一般市民へのアンケート調査をするというところで、それなりの規模でやっています。もちろん、市民の意識がそのまま研究開発のテーマになるわけではないのですが、最初の段階で市民意識を捉えて、それを起点にその後の検討を進めていくというところは特徴的かなと思います。

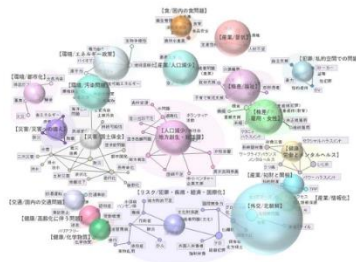
社会における取り上げるべき具体的問題の探索・抽出

方法

- 社会の問題を俯瞰するための一般市民(約6000名)へのアンケート調査
- 社会技術でテーマとすべき問題の把握、解決のアプローチ等の議論をするための様々な分野の有識者・関与者を集めたワークショップ

抽出の観点の一例

- 将来起こることが予想される重要な社会問題
- 人材や方法論が十分に存在しない
(⇒新たな知、ネットワーク、方法論の獲得)
- 人文社会・自然科学の研究知、現場知の融合



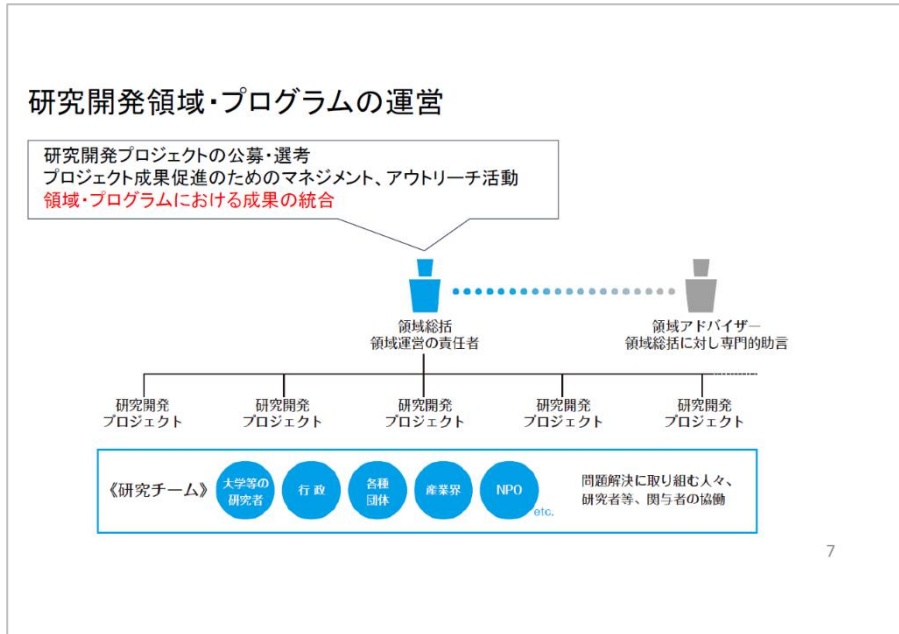
6

それから、いろいろな議論をしながらどういうテーマ設定をしていくなかなか難しいところです。もう既にいろいろな人が取り組んでいる社会問題については、我々はあまり扱わないです。

社会問題としてはあるけれども取り組めていない、あるいは、一緒になるとすごくいいソリューションになるのだけれど、ばらばらに取り組んでいてそうっていないといったところを対象にしています。このような社会問題は、取り組む人材や方法論が十分に存在せず、公募しても申請があるのかというところのバランスが結構難しく、いつも悩みながらやっているところです。

研究開発領域のプログラム運営については、JSTの他のファンディングも同じような体制でやっているかと思います。領域の運営の責任者である総括、それから総括に助言をするアドバイザーの先生方、これらのマネジメントチームの役割を吹き出しで書いています。3つ目の赤字で書いてあ

る「領域・プログラムにおける成果の統合」、これは実際やろうとするとかなり難しい取り組みです。後で少し触れたいと思います。



7

研究開発領域の推進例ということで一つご紹介をしたいと思います。「人と情報のエコシステム」、通称HITEと呼んでいます。2016年に立ち上がって、ちょうど今年終わる研究開発領域です。平たく言うと、情報技術のELSIを扱っている領域になります。①、②と書いていますが、情報技術がもたらしうる社会的影響を把握・予見をして、研究開発の初期段階で開発者にフィードバックを行う。技術側へのフィードバックだけではなく、既存の社会の規範とか法、制度を含む価値観を再検討する。技術側も制度側も両方変わっていくと。そういった「共進化」という言い方をしているのですが、共進化の仕組みをつくることを目指した領域です。

研究開発領域の推進例

- ・「人と情報のエコシステム」(HITE) 研究開発領域(2016～2024.3)

情報技術がもたらすメリットと負のリスクを予見・特定し技術や制度へ反映する。社会と技術の望ましい共進化を促す場や仕組みを構築することを目指す。

- ①情報技術がもたらしうる**社会的影響を把握・予見**し、初期段階で開発者にフィードバックを行うことで、より社会的に「筋のよい」技術を育てる
- ②技術と同様に人や社会も変化していくものであり、既存の**社会の規範や法、制度を含む価値観を再検討**する



8

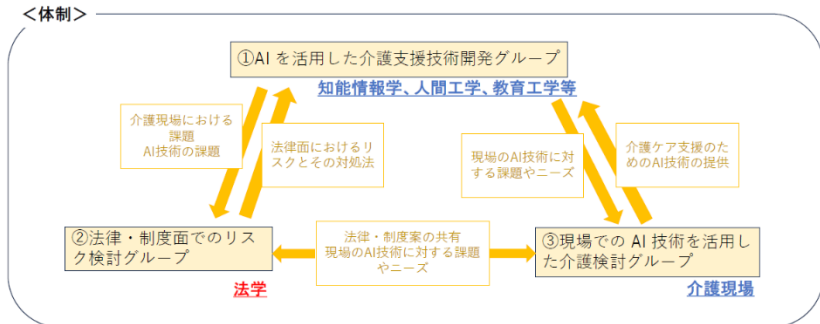
マネジメントチームは、総括、総括補佐、アドバイザー、全部で11名です。11名のうち8名が人文社会系のご専門です。

実際に採択されたプロジェクトは24件あります。24件中15件が、代表者の先生が人文社会系です。JSTなのでチーム型のプロジェクトで、代表者がいて、参画者/チームメンバーがいる。先ほど高田さまのご発表の中で、人社が主体となるプロジェクトづくりという話をうかがって、このHITE領域がそうだったなというふうに感じました。

代表者が自然科学の先生であっても、体制の中に人文・社会の先生が入っていらっしゃるケースももちろんかなりあります。例えば、介護現場でAIとかセンサーを活用していこうというプロジェクトでは、実際に活用しようとなった場合の法的な面や制度面でのリスクを検討するところで、法学の先生方が活躍をされています。

プロジェクト体制の例

過信と不信のプロセス分析に基づく見守りAIと介護現場との共進化支援(知能情報学)



12

これはプロジェクトを超えた連携の例ですが、左側がSTS（科学技術社会論）、人文・社会の先生が代表のプロジェクトです。右側が分子ロボティクスを専門とする自然科学の先生が代表者のプロジェクトです。この2つは別々のプロジェクトですが、マネジメントチームが「これは一緒にやったほうがいい」というアドバイスをし、連携して分子ロボティクス技術のELSIの論点を抽出する取り組みをされたという例です。

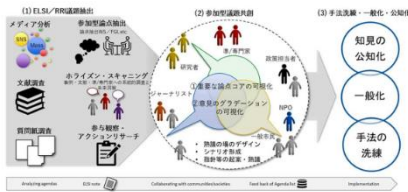
プロジェクト間の連携の例



標葉 隆馬先生(大阪大学・准教授)
STS研究者



小長谷 明彦先生(恵泉女学園大学・客員教授)
情報技術開発者



13

実は領域を超えた活動もあります。これは、先ほど申し上げたマネジメントチームの役割のうちの一つで、「領域の成果を統合する」事例だと思っています。この領域では個々のプロジェクトが自然科学側と対話をして ELSI の論点を抽出し、それを自然科学の研究開発と制度側にフィードバックする仕組みをどうつくるかという研究をしています。マネジメントチームは、その個々のプロジェクトの実践活動を眺めてそのノウハウを取り出し一般化させて、他の事業に展開していく活動をしています。実際にムーンショットや JST の ERATO—情報研究の最先端の科学技術研究をしている事業ですが、と連携して当該技術の ELSI を抽出したり、あるいは社会像の再定義をすることに取り組んでいます。

人と情報のエコシステム (HITE 領域) の説明をしましたが、それ以外にもたくさんの領域を扱っています。時間がなくてご紹介できないですが、

ぜひウェブサイトなどでチェックしていただければと思います。

最後に、ファンディング以外の取り組みとして、RISTEX は人文・社会のネットワークを持っていると自負していますが、そのネットワークを活用して JST 内の基礎研究事業と連携して ELSI を検討する取り組みも進めています。一番上の、ゲノム合成領域に関する取り組みを簡単に紹介します。

JST内の各事業と連携したELSIの取組

- ゲノム合成 (with 戦略的創造研究推進事業CREST/さきがけ)
- 食肉培養 (with 未来社会創造事業)
- デジタルファブリケーション (with COIプログラム)
- 脳AI融合 (with ERATO「池谷脳AI融合プロジェクト」)



16

JST の戦略事業の中に、ゲノム合成技術の研究開発をする「ゲノム合成領域」というのがありますが、それを伴走支援する形で RISTEX の中に「ゲノム倫理研究会」という研究会を立ち上げています。メンバーとして 16 名の有識者の先生方に参画いただいています。ご専門は幅広く、哲学・科学史、リスク学、それから STS (科学技術社会論)、公共政策、生命倫理、法学といったところで、多面的な観点から議論ができる体制をつくってお

社会技術の20年を振り返る

- ✓ かつてのように研究が実験室で閉じることはなく、社会で利用されていく。そしてかつては実現できなかったことが急速に実行可能になっていく。
- ✓ そこで問われるのは、本当に必要なことが実行可能になっているのか、そして実行可能ではあっても実行を控えるべきことがあるのではないか、といった問題。このような問題を科学者任せにせず、社会全体で検討することが重要。問題の検討には人文社会科学系の研究が不可欠。
- ✓ 科学技術の研究者が自らの生み出す知識の社会的意味を考えることを自らの義務と考えること、そして人文社会系の研究者は科学技術研究という巨大な知識生産の営みを適切に制御することを自らの義務と考えること。これらは今求められている学術の変容の一例。



社会技術研究開発センター長
小林 博司

小林センター長インタビュー「RISTEXのこれまで、いま、これから(2022年3月発行)」より



21

下にキーワードがありますが、トランスディシプリナリーのアプローチを我々はこれまで23年間ぐらいつとやってきました。第6期科学技術・イノベーション基本計画で総合知という言葉も出てきていて、かなりこれは近い概念かなと思っています。今後、第7期に向けて、こういったキーワードが出てくるのか注目しつつ、我々も時代に合わせてどういったファンディングがよいのか模索していきたいと思っています。

新澤: 小宮さまありがとうございます。1つだけおうかがいしてもよいですか。RISTEXとして向き合ってきた人社系のコアバリューが、人社系の中でも比較的特定の分野との付き合いが多い、あるいはそんなことないといった感触はいかがでしょう。

小宮: RISTEX代表としてではないですが、人文学と社会科学はだいぶ違う

のかなと思っていて。あまり比べることはしないですが、人文学の先生の参画は、社会科学に比べると少ないかもしれないという印象はあります。

人文・社会科学は一括りではなくて、分野によって個性があって、研究のアプローチも違うと感じますので、何か施策を進めようとしたときに、一括りにするのではなくて、その分野ごとに特徴を捉えてやっていく必要があるのかと感じています。

■ 人社系研究を伴走支援するアカデミック・インキュベーション

岡田 弘太郎／一般社団法人デサイロ 代表理事

柳澤 田実／関西学院大学神学部 准教授

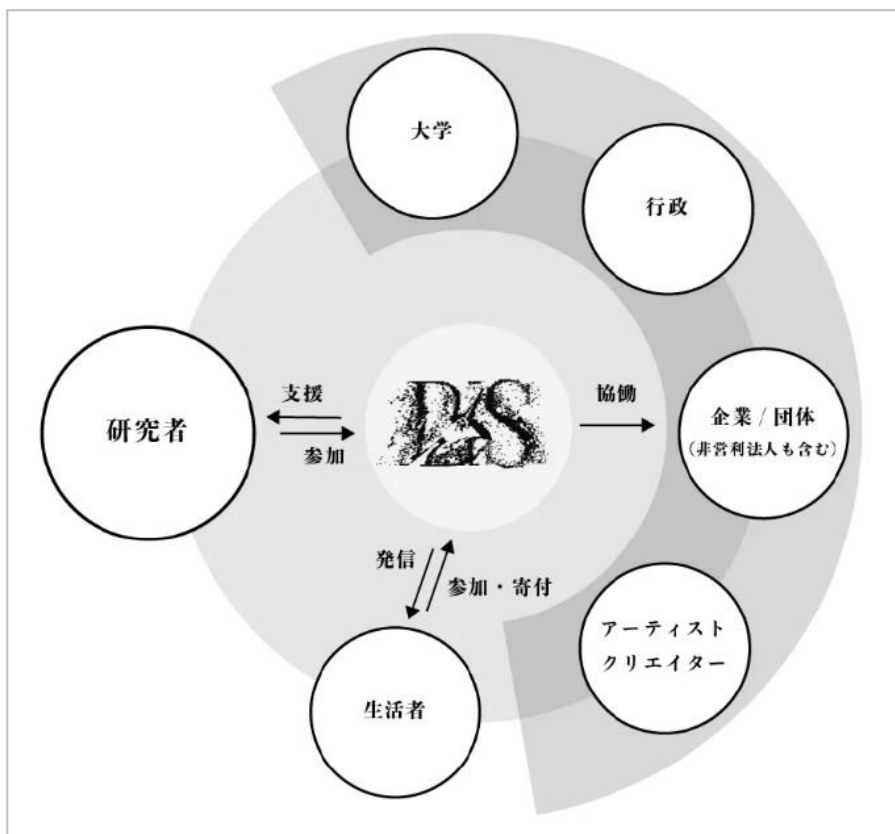
岡田: このセッションは、デサイロで研究プロジェクトを担当いただいている哲学・宗教思想が専門の柳澤田実さんと一緒に進行していきたいと思っています。冒頭は自分からデサイロの活動をご紹介します、後半では柳澤さんとのディスカッションを進めていきます。

デサイロなのですが、一般社団法人の形式で運営している団体になっており、立ち上がったのが2022年の10月、1年半ほど前になっています。私たちは「人文・社会科学分野の研究者と多様なプロジェクトを生み出すアカデミックインキュベーター」でして、インキュベーションやインキュベーターというのは、スタートアップやベンチャー企業を育成する際に使われる言葉だと思いますが、そのインキュベーションという概念を用いて、特に人社系の研究者の皆さまを伴走支援することに取り組んでいます。

デサイロのミッションも「研究“知”とともに、次なる社会を構想する」としており、これは僕自身のバックグラウンドとも関わってくるようです。デサイロを立ち上げる前、『WIRED』日本版というテクノロジーによって社会がどう変わっていくのかを伝えていくメディアで編集者をしており、そのときの経験として—もちろん人社系の研究者の方々もそうですが—社会の側から見たとき、さまざまな社会課題があるときに、“研究知”をそこに還元していけるはずなのに、社会に開かれていないのではないかと感じていたところがあります。なので社会の側から研究を見て、こういうミッションを掲げて活動しています。

簡単な概念図ですが、デサイロの周辺に研究者の皆さまとのネットワーク、コミュニティがあり、その知を我々が媒介することでいろんなステー

クホルダーに還元していく、つないでいくことに取り組んでいます。



理事としては、京都大学の非常勤理事なども務められた経験がある社会起業家の久能祐子さんと、人類学者の磯野真穂さんに就任いただいております。デザイロの活動資金は、立ち上げ時に久能さんのインパクトファンドから寄付という形でいただき、それを元に活動を立ち上げ、少しずつ事業収入が生まれている状況です。



久能祐子 | SACHIKO KUNO

社会起業家、フィランソロピスト。1994年に世界初のプロストン系緑内障治療薬を商品化に成功。滞在型社会起業家インキュベーターHalcyon、滞在型企業内起業家支援インキュベーター、フェニクシーを共同創業。現在は、ワシントンDCで社会起業家、フィランソロピストとして活動している。京都大学理事（2022年9月30日まで）、ジョーンズホプキンス大学医学領域評議員など。



磯野真穂 | MAHO ISONO

人類学者。専門は文化人類学・医療人類学。博士（文学）。早稲田大学文化構想学部助教、国際医療福祉大学大学院准教授を経て2020年より独立。身体と社会の繋がりを考えるメディア「からだのシュール」にてワークショップ、読書会、新しい学びの可能性を探るメディア「FILTR」にて人類学のオンライン講座を開講。

実際に、人社系研究支援のアプローチとして、どのようなプロジェクトに取り組んでいるのかをご紹介していきたいと思います。

今日来ていただいた柳澤さんと一緒に、立ち上げ期から取り組んでいるプロジェクトが、「DE-SILO EXPERIMENT 2024」というものです。4名の人文・社会科学分野の研究者の方に、「いま私たちはどんな時代を生きているのか」を考える研究テーマを設定いただき、プロセスの前半では研究を進め後半ではアーティストの方にコラボレーターとして入っていただき、その知を作品やパフォーマンスにするという取り組みをしています。

このプロジェクトのアイデアの起点となったのは、環境哲学者のティモシー・モートンという方が、「ハイパーオブジェクト」という概念を提唱しているのですが、アーティストのオラファー・エリアソンがその概念に影響を受けて作品を制作していたり、気候変動へのアクションを起こす団体がこの概念を理論的支柱にしていたりと、論文や書籍以外の形式で知が社

会に流通していることでした。論文や書籍はもちろん重要だと思うのですが、研究から得られた知見がそれ以外の形で社会に広がっていくことがあるのではないかと考え、こうしたプロジェクトを始めました。

柳澤さんには「“私たち性”の不在とその希求」というテーマを設定いただき—これはまた後ほどご紹介いただければと思いますが—プロジェクトに取り組んでいただきました。立ち上げから1年半ほど経ち、成果報告会である「DE-SILO EXPERIMENT 2024」というイベントを2024年4月に実施します。最初は「研究のアウトリーチの新しいかたち」として取り組んでいたものの、そのプロセスが実は重要だったということに気づきました。例えば、参加いただいているメディア研究者の和田夏実さんが、もともとハンセン病患者の方々を隔離されていた長島愛生園にて調査をされています。コラボレーターとして入っていただいたシンガーソングライター／音楽プロデューサーのマイカ・ルブテさんにも長島に実際に足を運んでいただき、そこで得たインスピレーションから楽曲を制作いただきました。



今後、生まれた楽曲を実際に長島の愛生園にいらっしゃる方々に聞いていただき、フィールドへの還元ができないかという議論もしており、こう

したプロセスの中で生まれていた価値は、生産的相互作用のような評価の枠組みで捉えることもできるかもしれません。

学際的な研究では、学問領域ごとに用語の定義が違ってなかなかかみ合わない、うまく融合できないといったことが起きたりするかと思います。今回は研究者同士というよりも、研究者とアーティストという異なる分野にいる方々のコラボレーションでしたが、それぞれの専門性に基づく目的設定—研究者は論文や書籍を書いていく、アーティストは作品を制作するというところで—に向かっていくことで、コラボレーションが円滑に進んでいった気がしています。

ほかに、研究者の皆さまに助成するようなプログラムを運営しています（デサイロ アカデミックインキュベーター・プログラム）。昨年がちょうど初年度で、120名の方から応募いただき、6名の方を採択させていただきました。団体規模が小さいので、既存のファンディングや助成に比べると、そんなに大きな額をお渡しできないところはありつつも、一方で、（我々の活動が）大口の寄付によるので、資金を柔軟に使っていただけることが特徴のひとつかと思っています。例えば、応募者の中に人類学者の方で「マルチモーダル人類学」という形で、テキストだけでは記述しきれない、フィールドでの事象を映像や写真で記録し作品化している方がいます。ご自身の映像編集に研究費を使いたいという話で、他の資金だとなかなか難しいのかもしれませんが、デサイロの場合はそうした使い方も可能です。また、生活費に3割当てられるという助成の仕組みにもしています。

もっとも大きな特徴は「助成」ではなく、「伴走支援」という部分です。例えば、採択者の中に、一般向けの講座を始めたいという方がいらっしゃれば企画・運営をサポートしますし、新しい研究会を立ち上げたいという方がいればその企画・運営を支援します。そうした活動のサポートも含め

て実施するのが「インキュベーション」だと位置づけています。もうひとつだけプロジェクトを紹介します。特に人社系の領域での構造的な課題が何で、どこが機会領域なのかを解き明かしていくリサーチレポートを制作しています。昨年クラウドファンディングで200万円を超えた額をご支援いただき、今、制作が進行しているところです。この後にご講演される南先生にもご協力いただいています。

クラウドファンディングというのは、もちろんお金をいただくこと自体もありがたいのですが、やはり課題解決に向けた仲間づくりという意味で今回100名以上の方に支援いただいたのがありがたかったです。さまざまなステークホルダーの皆さんにヒアリングしながらレポートをまとめているのですが、正解を提示するのではなく、これから議論していくたたき台をつくっていくようなイメージで制作を進めているところです。私たちとしても、レポート制作のなかで検討した機会領域に関して新たなプロジェクトを立ち上げていく予定です。

ここまで取り組みをいくつかご紹介しましたが、デサイロとして取り組んでいきたいことは大きく2点あります。研究と社会との多様な接点をつくって、まずはその価値をプレゼンテーションしていくこと。そのために一つひとつのプロジェクトがあって、今日で言うところの万華鏡、kaleidoscopeのような魅力を社会一般に理解していただく。それにより、社会のコモンズとして、研究者・研究プロジェクトが支援される状況をつくっていきたいと考えています。

その際に重要なのが、なるべく柔軟に使えるような資金を調達して、研究者の方々に還元していくこと。そのために事業収入、寄付、メンバーシップなどを組み合わせながら、非営利団体ではあるのですが、事業成長を考えながらやっていこうと思っています。そこから、柔軟な資金だからこその研究が生まれていくと、人社系研究者のエコシステムに還元でき

るものが増えていくのではないかと。そうした理念で今後も続けてければと思います。

ここからは、柳澤さんとのディスカッションに入りたいと思います。

まずは、柳澤さんの研究テーマや、デサイロでどのようなプロジェクトに取り組んでいただいているのかを紹介してもらえますか。

柳澤: はい。関西学院大学の柳澤と申します。よろしく願いいたします。私自身は今回の人文・社会科学系研究推進フォーラムの一番の主題である、どのように研究を推進していくかについては全く専門ではないので、助成をもらっている研究者の視点からのお話になることをどうかご容赦いただきたいと思います。エピソードトーク的になりがちですが、よろしく願いいたします。

もともと、東京大学の駒場の超域文化科学の出身で、領域横断的な研究が盛んに始められた時期に大学院時代を過ごしました。ただその中心にあるのは哲学、さらに言うと、宗教思想、キリスト教思想を一番の専門にしております。最近では、少しずつ心理学の手法、あるいは心理学との共同研究という形で、本当に一番ニッチなところでは、日本のキリスト教徒に道徳基盤理論などに基づく調査を行って、いわゆるキリスト教的な道德感と、—それをどう定義するかが難しいんですけども—日本人がもともと持っているかもしれない道德感がどのようなものか、例えばキリスト教徒ではない日本人と、キリスト教徒の日本人のデータを比較してというような、そういう量的な研究も徐々に行っています。

デサイロのほうでは「私たち性」というテーマで取り組んでいます。これも実は、デサイロさんが研究助成にあたって「今私たちがどういう時代を生きているのか」というテーマで考えてみませんか」ということで、考え

させていただいた研究テーマです。

研究を始めてから「私たち」とは何かという問題については、別の科研費プロジェクトでも取り組まれていて、時代的にこういう関心が共有されていることに気付いたりもしました。個人主義がまん延しているなど、既にいろいろ言われているわけですが、根本的に「私たち」であるということがだいぶ分からなくなっているのではないかと、学生との心理学の調査などから感じ取ることがありまして。哲学的にも「私たち」であるということ自体が、そもそもどうということなのかを考えてみたいと思い、助成金をいただいて研究をしています。

岡田:今のお話をうかがって、一つ言い逃してしまったことがあったと気付きました。今回、特に研究者とアーティストで協働いただくときに、同時代性——実は同じような課題意識を共有している方々に組んでいただき、その興味関心や課題感が分野を超えてつながっていたというのをすごく実感しているところです。

柳澤さんにはプロジェクトとして担当いただいてどうだったかという率直なところもお伺いできればと思います。

柳澤:アーティストコラボレーションすることについては、私自身、東京大学の駒場キャンパスという場所が非常に学際的で、研究者と制作者の関わりは珍しくなかったものの、ここまでポピュラーに展開していくのは初めての経験でした。

そういう意味で、デザイロの特徴は、先ほど岡田さんもおっしゃっていたことですが、専門知と社会との接点作りに関して、ある意味ではなかなか学問側では考えないようなことまで提案してくださる点にあると思います。

岡田さん筆頭に二十代から三十代前半の若い方々が、人文社会知が必要

という動機に基づいて運営してくださっているからこそ出てくる発想だと思います。しかもアカデミックバックグラウンドではない方たちで運営されているということで、よりビジネスに近いアプローチを知ることができ、非常にいい機会にはなっています。言うまでもなく、専門的な研究に助成金を付けていただくことも研究者としては重要です。同時に、デサイロのように、社会との接点に特化した助成金があるのも、人文社会科学にとっていいことではないかと思っております。

もう1点だけ。本当にこれは経験ベースのお話ですが、私自身は30代の後半から40代は子育てにだいぶエネルギーを取られていました。研究者同士の夫婦なのですが、一緒に住むと職場が離れてしまったり、実家が遠かったり様々な苦勞がありました。皆さんもいろいろなご経験あると思います。その状況下で助成金を申請するのも大変で、論文数も含め生産性がだいぶ落ちました。実はデサイロの助成に関しては、子供が中学に入って、よし研究するぞと思っていたタイミングでいただけたというのが、個人的なことですが非常にありがたかったです。年齢や業績ではないところで、ある意味では企画やアイデアの面白さでお金をくださって、研究させていただくというのは、育児とか介護とか自分の病気などで、やむを得ず生産的でない時期があるけれども、私はこれからやるぞという人にとっては非常ありがたい機会になると思います。

海外、アメリカなどの大学で働いている研究者の友人とも話すのですが、日本だとどうしても学会などで作られた人間関係ベースで仕事が回っていく形が多いと思います。なので、いったんその場所から不在になってしまうと、もう蚊帳の外になることを経験されている方も多いのではないかと思います。女性研究者をもっと増やそうといろいろなことがなされていますが、「通常あるべき社会のペースに合わせるために、無理をするための手助け」はいろいろ出てきていると思いますが、むしろ、(不在の時期はあつ

たけれども) 今頑張っって第一線に戻りたいというところへの支援こそ、女性身体の生物学的条件を尊重するという意味でも、本当に大事なことだなと思います。以上のことは女性の研究者として言っておきたいという気持ちもあって付け加えさせていただきました。

岡田:先ほどおっしゃっていた、私自身にアカデミックなバックグラウンドがないことは、強みでもあり弱みでもあると思っています。多分野のアーティストとのコラボレーションというところも、さまざまな分野の方々と編集者として日々交流するからこそ生み出している新結合という側面もあると思います。ただ、デサイロで「概念の社会化」と言ったときに、その学問分野でこれまで蓄積されてきたものを軽視し、「社会にとって使えるもの」を表層的に取り出すような行為をしていないか、社会への還元という点に軸足を置きすぎていないか、という部分はとても慎重に考えたいと思っています。

もしよろしければ、柳澤さんから、先ほどアーティストとのプロジェクトは共同研究的な側面もあるのではないかという話もあったと思いますが、今回、映像作家の Pennacky さんと 1 年くらい議論を重ねながら取り組んでいただいていると思いますが、その具体のところをお伺いできますか。

柳澤:Pennacky さんは 20 代の映像作家の方ですが、ミュージックビデオを中心に、いろいろと作られています。「私たち」であるというのがどういうことかを考えるときに、記憶のなかでのイメージの共有は重要だろうと思っていました。Pennacky さんの作品からこうした問題について考えさせられていたこともあったので、お声掛けしたら、やはり自分もそのテーマについて考えていたように思うと仰ってくださいました。映像作家なので無意識的に作品制作を通じてそのような探究をなさっていたようですが、

そのような経緯でコラボレーションがスタートしました。



先ほど岡田さんも言ってくくださったように、面白い部分があるとすれば、自分の理論に則してアーティストに作品を作ってもらおうということではなくて、同じテーマに向かって制作でアプローチしている人と、研究でアプローチしている人が両方いるという形で進んでいる点かと思います。またあと数か月やって、最終的にどうなっていくかという部分はありますが、非常に面白い試みができているのではないかと思います。

さらに言うところ—これもなかなかどう言うか悩ましいところですが—、いろいろな研究助成が、ニーズが前提になっているということがあると思います。先ほどのJSTの小宮さんのお話で、JSTの企画に関わっている人文の学者は社会科学者より少ないかもと仰っていましたが、そうだろうかと非常に考えさせられました。というのは、社会で既に問題になっていたり、社会で浮かび上がっていることよりは、哲学であれば存在論や認識論という形で、よりそのもっと手前のところから考えるのが人文科学の課題といたしますか、役割だからです。

その意味で、実はアーティストとの共同研究は人文科学者としては非常にやりやすいことだとも言えます。アーティストもニーズベースで作ってないですよ。なので、意外なほどというか、実は人文科学の研究者とアーティストっていうのは、結構発想のところで重なり合うところが多いと改めて思いました。そういうこともあって、今回のプロジェクトも非常に有意義なものになっています。ここ 20 年くらいで芸術と研究の協働自体はそんなに珍しいものではなくなってきたと思うのですが、人文科学の研究者として、アーティストとより原理的な問いの部分でつながっていくという確信を得たことが、私にとっては非常に有益でした。

岡田:ありがとうございます。本日は kaleidoscope・万華鏡というところで、柳澤さんご自身が感じている、人文・社会科学研究の可能性や価値をどのように言語化されているのかを、もう少しうかがっていきたいと思います。

柳澤:先ほどの小宮さんのお話でも、とても嬉しかったのは、ゲノム倫理の共同研究に哲学の方も入っているということで、そういう役割を担うことは本当に理想的ではないかと思います。

先ほども言ったこととも重なりますが、人文科学は役に立つとは思いますが、その役に立ち方というのが、何か既に浮かび上がっている問題に対して工学的な形で役立つということではないと思うのです。むしろ問題の前提を疑うことが人文科学の醍醐味だと思うんですし、担うべき役割だと思うのです。そもそもそういう問題設定でいいのか、という検討です。

なので、ざっくりばらんに研究者の視点から言わせていただくと、例えばウェルビーイングが流行っているぞ、科研費もそれだと取りやすいぞとかあるんですね。けれど、ウェルビーイングという概念一つ取っても、それは歴史的な概念でしかないとか、それを目的に設定すること自体の是非とか、そういう思考の条件から疑っていくのが、人文科学の役割だという意

識はあります。先ほどのゲノムの話もそうですけど、科学技術が前提としている人間観や道徳観について、科学者の方たちはもちろん道徳観・人間観をずっと精査しているのではなく、もっと技術的なことを見ているということで、それが妥当なのかを哲学的に吟味していくのが一番役に立つ部分ではないかと思います。

人文・社会、特に人文ですけれども、そういう意味でも歴史研究が非常に重要になります。そしてそれはとても時間がかかると思うんです。ただそこを果たしてこそ、人文の研究は、科学的・数理的な新しい方法との連携に意味があることができると思いますし、真に役に立つものになるのではないかと考えております。

岡田: そういった長期的な目線で役に立つ研究を支援していくために、各ステークホルダーに期待する役割は何でしょうか。

柳澤: 具体的には、書類書きを減らすとか、会議を減らすとか、そうした些末なことになってくるのかもしれませんが、人社に限らず、自然科学分野でも言われていることだと思いますが、とにかく時間をかける研究を許してほしいというか。おそらく研究者にとっては、お金というのも基本的に全て時間を意味していますよね。それは研究に避ける時間を保証するためのお金であって、それ以上望むものは基本的にないと思うんです。今、人文・社会の研究者も新書など書いたり、特に若い方たちは早い時期にそういう機会にいい意味でも恵まれているけれども、もしかしたらそれは長期的な研究という意味ではどうなのかという問題もあります。「人類のために長期的な視野に立って研究してよい」というマインドセットを、これでもかという形で徹底させないと、いろいろな雑用も多いし、邪念も多い。そこを本当に、各ステークホルダー、大学の研究者もみんな徹底して、長期的な研究、基礎研究に専念させるべきだと声を大にして言いたいところです。

岡田:ありがとうございます。私たちとしても、さまざまな活動を通じて、人社系研究者の支援の新しいアプローチを引き続き模索していきたいと思っています。今日お伝えしたものは私たちのいくつかの実践例にしか過ぎず、と皆さまからのお知恵をお借りしながら取り組んでいけたらと思っております。

というところで、こちらのトークセッションを締めさせていただければと思います。改めまして、柳澤さんありがとうございました。

柳澤:どうもありがとうございました。

新澤:ありがとうございます。お二人にオンラインから質問が来ています。

一つ目、研究者・研究成果を接続する先として、大学、企業、行政、アーティストなど多様なステークホルダーがあるときに、この多様なステークホルダーとどのように連携体制やコネクションを築いていったのか。またその連携のモチベーションを持ってもらうために工夫したことなどあればおうかがいしたいと。これは岡田さんをお願いできればと思います。

岡田:ありがとうございます。先ほどの図で、さまざまなステークホルダーを示しましたが、現時点ですべての方々と連携できているかということ、まだ途上です。

例えば先ほどのお話にあったアーティストであれば、アーティストの方にとっても新しい挑戦やモチベーションになるプロジェクトとして受けていただけることが多く、とてもありがたく思っています。企業さんでは、例えば新しくつくる施設のコンセプトづくりなどを研究者と一緒にやっていくようなことを考えていらっしゃることもあります。明確にこういうニーズがあって、こうすればいいという正解はないので、探りなが

らやっているっていうところです。

新澤:では続いて二つ目で、研究者とアーティストの共同研究では、研究成果はどういう形で発表するのでしょうか。研究者は論文、アーティストは作品制作やパフォーマンスというように分けるのか、それとも論文であれ作品であれ、研究者とアーティストで共同作業を行うのでしょうか。あるいは社会貢献活動を分業するようなイメージでしょうかといただいております。ここは柳澤先生からお願いできるでしょうか。

柳澤:ありがとうございます。正直なところ今それをやっている最中で、方法として確立されているものではないので、基本的には別々に論文と作品とを作ることになります。ただ作品制作後に場を設けて、もう一度お互い振り返ってディスカッションする機会を持ちますので、そこで一つ最終的な共同の結論というものが出していけるのではないかと考えています。

社会に価値をもたらす知 産学官連携から考える人社系研究

南 了太／京都精華大学国際文化学部 准教授

「社会に価値をもたらす知 産学官連携から考える人社系研究」と題し発表させていただきます。2020年に北海道大学主催の際（第6回人文・社会科学系研究推進フォーラム）に講演をしまして、4年経ったアップデートしたものを紹介したいと思います。多少重なっている部分がございますがご容赦ください。

さて私は2006年から産学連携をしております、だいたい18年ぐらい教員、職員、コーディネーターの立場で実践してまいりました。今日は過去に所属していた同志社大学、京都大学、現職の京都精華大学の例を織り交ぜながら、自身の研究を含め事例紹介を行いたいと思います。

結論から先に申しますと、産学連携の場面において人文社会系分野は理工生物系分野とは異なる価値をもたらしているというものでございます。

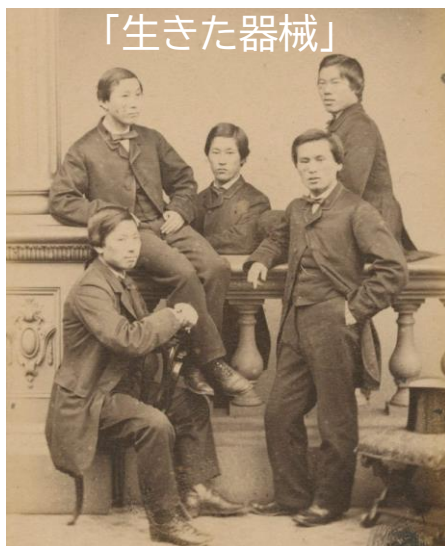
産学連携の実践以外で私自身の研究を少しご紹介しますと、まずは産学連携の社会的な研究ということで、今日紹介する人文社会系の産学連携の研究や、明治時代から平成時代まで産学連携がどのように変遷してきたか、そういった研究をしています。また、産学連携の実践的な研究ということで、研究推進の在り方や、教育面で実践教育などをやっております。そして産学連携の経営的な研究ということで、技術経営や、後ほど紹介します企業のガバナンスの研究をしております。

突然ではございますが、時間を明治時代までさかのぼりたいと思います。江戸時代に開国を要求されて以降、日本は大きな変革に迫られました。18世紀末から19世紀末はイギリスの産業革命とフランスの市民革命において、ヨーロッパが一大文明を築いた時代になります。このような状況下で

日本もそれ以前の儒教の考え方を否定し、西洋の科学技術や進歩という概念を取り入れ、科学技術の先進性と進歩こそが文明の基準である、近代化であるという理解をしました。

その際に活躍したのが長州ファイブという5人組です。イギリスに密航しロンドン大学で学びました。生きた器械ということで、すなわち先進諸国から学んでその人材を後に活躍していくというモデルを構築しました。

長州 ファイブ



(左上) 遠藤謹助 (中央) 井上勝 (右上) 伊藤博文
(左下) 井上馨 (右下) 山岡寛三

画像引用：長州ファイブ | 萩市観光協会公式サイト | 山口県萩市 (hagishi.com)

3

左上、遠藤謹助。日本人で初めて銅貨等の鑄造に成功した人物です。中央、井上勝。この人は日本の鉄道の父と呼ばれている人です。いわゆる東京から横浜間の鉄道開業に尽力した人です。丸の内にも彼の銅像があります。右上、伊藤博文。伊藤博文はご承知のとおり総理大臣を経験して、4度総理大臣を務めた人物です。憲法制定にも寄与しました。師匠の吉田松陰からは、伊藤は学問は劣っているけど周旋家、すなわちコーデ

イネーターとしてすごく優れているんだと言われていました。すなわち伊藤はその後もいろいろな人の間に立ちながら活躍していきます。坂本龍馬しかり伊藤博文しかり、間に立つという仕事というのは極めて大事でして、大学においては URA の方々の仕事は極めて大事なものだと考えております。あと左下、井上馨です。この人は外務大臣や大蔵大臣を歴任しまして鉄道事業等、殖産興業を推進していった人物です。

今僕が割と関心を持っているのが、右下の山尾庸三です。山尾は日本の工学教育の父と呼ばれる人で、工業の父とか工学の父と呼ばれています。彼はロンドン大学に学び、その後産業革命で発展していたグラスゴーに移り、技術研修を受けるとともに夜学で技術を習得しました。後に工部大学校を設立します。それで伊藤と井上馨は政治、山尾と遠藤と井上勝は技術官僚として活躍していくというのが明治の流れとなっております。

その際に、日本は遅れていたのでお雇い外国人を呼びます。ヘンリー・ダイアーと呼ばれる人です。この人が何したかといいますと、いわゆる実践教育を最初に持ち込んだ人物です。サンドイッチ方式と言われます。先ほどの山尾とヘンリー・ダイアーはグラスゴーの時に同窓だったみたいです。

そこで基礎課程、専門課程、実地課程という2年ごとの取り組みをして、土木、機械、建築、電信、化学、冶金、鋳山、造船 6 学科を設立します。実践的な活動として学んだものを赤羽工場に持って行って、それが今のインターンシップの起源になるというものです。

やがて工部大学校は後の東京大学工学部に吸収され、世界初の工学部につながっています。実践教育というのは明治時代からすごく盛んに行われていたということが分かるかと思えます。

教育面から産学連携を言いましたが、明治時代、研究面からも個人ベースでいろいろな形で産学連携がなされています。例えば田中久重と工部大

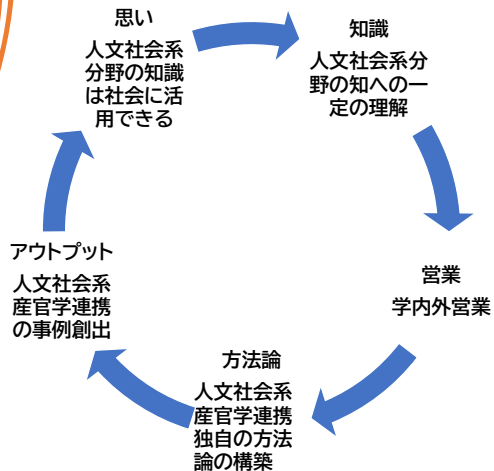
学校の藤岡市助がコラボして東芝をつくります。またタカチアスターゼで有名な高峰譲吉、理化学研究所の設立者です。彼も工部大学の1期生です。三共製薬をつくります。あと鈴木三郎助と池田菊苗で味の素をつくります。京都大学の医学部の講師だった代田稔がヤクルトを設立します。あとは豊田喜一郎と隈部一雄、東京大学の工学部の教授がコラボしてトヨタを作っていくという形で、当時はベンチャー、技術移転、顧問など、いろいろな立場で教員が個人ベースで企業とコラボすることで産学連携を推進していたという事例です。これが当時の産学連携の状況です。

やがて1995年以降、科学技術基本法が制定されます。基本的に産学連携といいますと研究開発を目的にして、理工生物系分野の知識を使って共同研究をやったり、技術移転をやったり、あと国のお金を取りにいったり、ベンチャーをやったりなどで事業化をしていこうというのが一般的なモデルです。こういう形で毎年文部科学省の産学連携実績というところでも共同研究の成果が指標として記されているという状況になります。

僕自身は、もちろん理工系分野も大事ですが、人文社会系分野もすごく大事ということを書いてこれまで実践してきました。思いとしては、人文社会系分野の知識というのは社会にもっと活用できるんだ、と。何より力を入れてきたのが営業です。学内の営業と学外の営業を積極的にやってきました。それを通じて方法論を独自で構築し、アウトプットを生み出していくというサイクルをひたすら回してきて、仮説として産学連携において人社系分野は理工生物系分野とは異なる形で価値を創出しているんだということを書いてまいりました。

実践してきたこと

人文社会系分野の価値創出



仮説:産官学連携において、人文社会系分野は理工・生物系分野とは異なる形で価値を創出している

7

以下紹介していきます。イノベーションの創出は理工生物系分野のみでは困難だと思っています。あと人社系、理工・生物系、芸術・デザイン系いろいろな知や発想が必要だと考えています。座学から実学、また実践教育、研究へ高まっている中で、そういう形で研究もしていかなければいけないと考えています。

何よりも仲介役の人が必要だと思っており、大学と企業、大学と地域の間立つ人というのが本当に大事だと思います。そこで、産学連携の切り口で人文社会系分野を捉えてみてはどうかということを経験してやっておりました。

ただ人文社会系の状況というのはあまりよろしくないです。ご承知のとおり、科学技術に偏重したこの30年間の政策があります。科学技術基本法において、この法律は科学技術（人文科学のみに係るものを除く）の振

興に定めという記載があつて、やはりこれは文系を無視した形で推進がされてきました。最近でこそ総合知の必要性が問われていますが、そのような政策が展開されてきました。

さらにもっと歴史をさかのぼりますと、文系と理系の区分というのが、第2次高等学校令が挙げられます(1918年)。「高等学校高等科ヲ分チテ文科及理科トス」すなわち、我々は入試のときに文系・理系みたいな分け方をしますが、そういうものも歴史的につくられたものです。さらに官僚制においても文官、技官という区分があります。科学技術による経済成長前提の社会観があり、どうしても科学技術、理工系分野を中心に発展してきたという事情は否めません。

人文社会系産官学連携の状況

<p>政策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学技術に偏重した30年間の政策(「科学技術基本法」第1条 1995) 「この法律は、科学技術(人文科学のみに係るものを除く。以下同じ。)の振興に関する施策の基本となる事項を定め・・・」 ・総合知の必要性 	<p>歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文系・理系の区分(「第2次高等学校令」第8条 1918) 「高等学校高等科ヲ分チテ文科及理科トス」 ・官僚制:文官/技官の区分 ・科学技術による経済成長前提の社会観
<p>先行研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人文社会系分野の共同研究数、金額とも全体の約2%程度 ・評価が困難 ・報酬が曖昧 ・先行研究少 ・アウトプットが曖昧 	<p>人社系専門人材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究支援者 約8%(167名/2,083名) ・企業現場 約1.3%(7,289名/559,983名) ・公的機関 約3%(1,124名/34,745名) <p><small>科学技術・学術政策研究所『科学技術指標2020』日本の企業における研究者の専門分野(2019年)</small></p>

人文社会系分野も何点かは事例研究があり、先行研究を調べますと共同研究数、金額とも全体の2%ぐらいしかない。そこで書かれている内容は

評価が困難であるとか、報酬が曖昧、先行研究が少ない、アウトプットが曖昧、そういったことが記載されており、やはり産学連携というのは基本的に理工系分野で進んでいったという前提になっています。

さらに支援人材も少ない。過去に JST の産学連携コーディネーターが登録するサイトで専門人材がどういう学位を取っているかを調査しました。167 名の文系分野研究者の登録者があり、約 8%しか研究支援者がいませんでした。あと企業現場においても 1.3%しか専門家はいませんし、公的機関においても約 3%しかいないという形で、人社系を推進するにせよなかなか人材がないという課題もあるというのが今の状況です。

多くの人社系の教員にとって、研究開発目的の連携というのはやはりなじみがないです。参考になる事例・方法論が少なく、自分で実践していかなくてはいけない。2006 年からずっとこういうことをやっており、今回バリューということで、僕自身は価値というのを政策や経営判断、戦略、事業などに、どのように大学の知が活かされたかという観点で、産学連携の目線で捉えております。これについて事例紹介をしていきたいと思いません。

2006 年、最初に仕事をしたのは同志社大学のときでした。まずやったのが、同志社大学に所属する人文社会系の教員約 250 名に対して、仕事が終わった後に研究室に突撃訪問しまして、どんな研究をされていますか、企業とコラボする際にはどんなことができますかとか、そういうことをひたすらヒアリングしました。そこからの結果としては、デザイン、まちづくり、地域振興、マーケティング、産業人材の育成、コンテンツ、調査、コンサルティング、講演が可能であると言われました。すなわち理工系とは全然違うのですが、文化（文科）系でも実際にやっているよとも言われてまして、そういったことを可視化するような研究紹介集、102 名の人社系に

特化したものを作りました。これが当時珍しかったということもあり、これが機会となり文科省の産学連携戦略展開事業というのが当時あったのですが、そこに採択されました。ていったということがあります。

同志社大学人文社会系産官学連携研究紹介集 (2009)



・調査期間：2006～2008

・対象：同志社大学に所属する人文社会系研究者を対象に、どのような産学連携が可能かをヒアリング調査。

その結果、①デザイン、②まちづくり、③地域振興、④マーケティング、⑤産業人材の育成、⑥コンテンツ、⑦調査、⑧コンサルティング、⑨講演が可能であるとの回答を得た。



・102名の人社系に特化した産官学連携研究紹介集。

・全国で初めて人文社会系分野で文部科学省「産学官連携戦略展開事業」（2009）に採択。

11

続いて、同志社大学の例だけでは十分ではないので、この指とまれ方式で京都の9大学に人社系・芸術系の分野どんながありますかという呼びかけをし、研究会を開催しました。そこでやったのは、見えにくい人社系分野の事例を40個ぐらい集め、それを4つのパターンに分けたというものです。

1つ目は、研究系の産学連携ということで、教員の研究分野をさらに発展させるような目的。マーケティングや地域産業調査、あと教育系の産学連携ということで学生の教育効果を高めるようなインターンシップやPBL教育。あとは事業系の産学連携ということで、大学の資源を活用して

ビジネスへ応用するというもの。例えばコンサルティングや商品開発。あと社会貢献系の産学連携ということで、大学の資源を活用して地域を活性化させる、キャンパス開放やボランティア。そういう4定義で分類をすることにしました。

京都の大学の事例からみた社文系・芸術系産学連携報告 (2009)



形態	研究系 産学連携	教育系 産学連携	事業系 産学連携	社会貢献系 産学連携
目的	教員の研究分野をさらに発展させるために行う連携	学生の教育効果をさらに高めることを目的とした連携	大学の資源を活用しビジネスへ応用するなど収益性のある連携	大学の資源を活用し地域活性化等に活用させる連携
主体	教員	学生 (教員はフォロー役)	教員(個人) 大学事務局	教員 大学事務局
資金	主に依頼者負担	場合による	主に依頼者負担	主に大学負担
取組	①地域産業調査 ②マーケティング調査	①インターンシップ ②PBL教育 ③フィールドワーク	①コンサルティング(講演・指導含む) ②監修・翻訳・通訳 ③商品企画・開発	①地域連携 ②展示会・イベント ③キャンパス開放 ④ボランティア

・京都産業大学、京都工芸繊維大学、龍谷大学、立命館大学、佛教大学、京都精華大学、京都府立大学、京都造形芸術大学、同志社大学
 ・見えにくい人文社会系産学連携の事例を収集(40以上)、人文社会系産学連携の連携方法を4類型

12

それ以外にも個別に多くのプロジェクトをやってきました。例えばJRAと連携した事例です。JRA、競馬で有名ですけど、1994年には24%いた若者ファン層が2006年には7%に減少するなど、若者層の競馬離れの問題がありました。そのファン層を増やすためにJRAは同志社大学と立命館大学にパブリシティを期待しました。そこで人類学で映像を得意にしている先生に依頼をし、コラボレーションしました。結果として、同志社大学と立命館大学の学生がそれぞれ馬の美しさに着目した映像を人類学的な観点で制作し、京都競馬場の11月のG1レース、マイルチャンピオンシップで

放映しました。フィールドワーク・映像人類学の知識を活用した人社系の産学連携ということで全国紙にも掲載されて、JRA からいただいた受託費用よりもかなり大きな広告効果、あとはこの成果を PR することで学生たちも希望先に就職したというケースがあります。

JRA 若者層が『馬の美しさ』に関心を高める 広告プロモーション企画研究(2007)



- ・JRAでは、1994年には24%いた若者ファン層が2006年には7%に減少するなど、若者層の競馬離れの問題
- ・若者のファン層を増やすために、JRAは同志社大学、立命館大学にアイデアとパブリシティを期待
- ・Pang Jun社会学部嘱託講師・映像プロジェクトゼミ・同志社大学リエゾンオフィス
- ・期間:2007年4月~2007年11月
- ・契約形態:受託研究

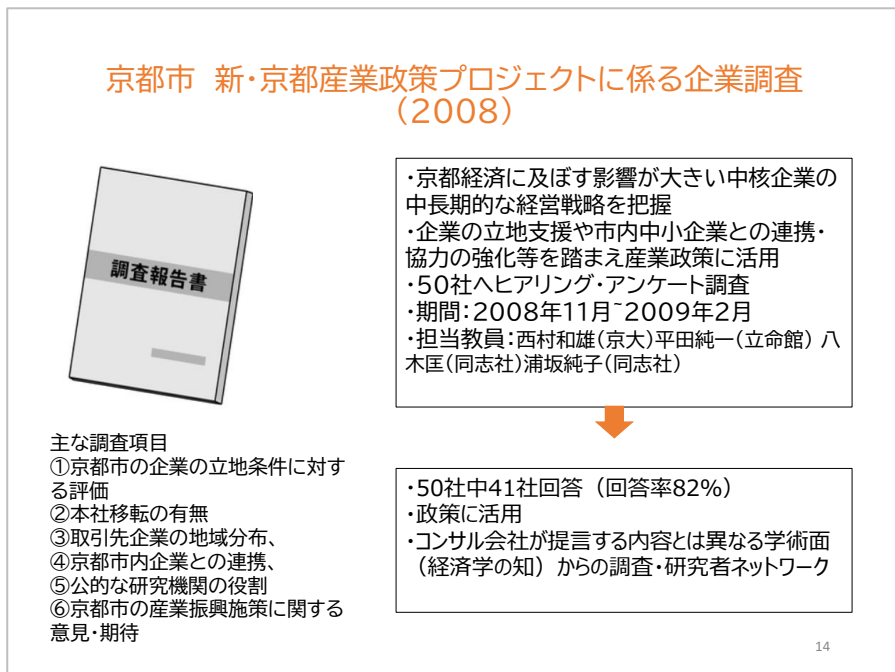
↓

- ・同志社大学と立命館大学の学生がそれぞれ制作し、京都競馬場の11月のG-1レース「マイルチャンピオンシップ」で放映
- ・フィールドワーク・映像人類学の知識を活用した人文社会系産学連携
- ・全国紙掲載による広報効果・学生の教育効果

13

それ以外に、京都市から京都経済に及ぼす影響が大きい中核企業の中長期的な経営戦略を把握したいというニーズがありました。そこで当時、同志社大学の八木先生に相談したところ、京都大学の先生も知っているし、立命館大学の先生も知っているし、1回ネットワークを組んでやってみようという話になりました。それで、京都の50社に対してヒアリング・アンケート調査をしました。京都市の企業立地の条件に対する評価や、本社移転の有無など、そういったことをヒアリングし、とても高い回収率で回答をいただきました。それを京都市の政策に生かし、コンサル会社が提言す

る形ではなくて経済学の特に統計学の先生方が専門とされているような調査、研究者のネットワークに通じて政策に生かした例があります。



京都大学に行ってから、組織対組織の連携の窓口をひたすらやっております、一つは日立製作所と京都大学でやった事例があります。2050年の大学と企業の在り方を探索しようという事例です。これをどう進めていくか考えた際に、複数の研究者へのインタビューを通じて2050年の社会課題について列挙し、合同ワークショップを開催しました。発言から社会の兆しを取り入れ、各研究者の共通項やモノの見方を洞察しました。

社会課題は何から生まれるかと考えると、不安が源泉であるということが分かりました。生命、財産、人権、アイデンティティなどの不安があるときに社会課題が生まれる。それを「Crisis5.0」と名付けまして「信じるものがなくなる」「頼るものがなくなる」「やることがなくなる」2050年にど

のような社会観を描くかが大事だということを、書籍等にもまとめました。

今、科研費をもらっている研究としては、イノベーションは科学技術で起こるものではあるかと思いますが、僕は何よりも経営判断がすごく大事だと考えています。そこで、大学の教員が企業の社外取締役・監査役に就任して、どういう知識を還元し、どのように関与しているかということを、上場企業 200 社を調査しました。結果としては、2017 年と 2022 年の比較ですが、現在大学教員で役員になっているのは 171 名から 234 名へ約 1.4 倍増加。受け入れ企業は 108 社から 135 社に 1.3 倍増加。慶應義塾大学、早稲田大学、一橋大学が多くて、私立大学が国立大学の 2 倍の役員を輩出していることが分かりました。さらに専門分野を調べていくと、法学、経営学、経済学、工学という順番で企業の経営判断にすごく関与していて人文社会系分野が経営判断の場面で寄与していることが分かりました。

京都精華大学に行ってから、主に実践的な教育を中心にやっています。例えば京都の中小ベンチャー企業 4 社に対して、文系の学生が学生目線で企業の魅力を発信するような動画サイトを作っています。各チームで京都企業の実態を文献やインターネットを通じて調査し、学んだ知識を基に企業に対してインタビューを行う。インタビュー内容を編集して映像にまとめるといった実践的な教育を、人文系分野でも行っているものです。

それ以外には、京都精華大学には漫画、デザイン、芸術などの学部がそろっています。例えば東急不動産は最近、昔の学生マンションをさらにリニューアルする形で、キャンパスヴィレッジを首都圏中心に展開しています。ここと連携して学生にとってよりよい居住空間を提案するために、8 名の映像やデザイン、建築、日本画等の学生とコラボレーションし、学生にとって理想の住まいをかなえる新たな商品・サービスについて提案しまし

た。例えばキャンパスヴィレッジ間の共通のコイン、留学ができる制度、シェアキッチン、コミュニケーションなどいろいろなアイデアが出てきて、東急不動産のキャンパスヴィレッジの中で一部生かされているという例もあります。

東急不動産 キャンパスヴィレッジの利活用提案 (2021)



連携先

・東急不動産株式会社住宅事業ユニット

背景

・キャンパスヴィレッジの利活用

目的

・学生にとってより良い居住空間のあり方を、実際の運営に即して考えることで学生の社会実践力を養うと共に、学生時代における住まいの重要性をあらためて見つめ直すこと



受講生：8名(映像、デザイン、建築、日本画、マンガ、国際文化)

・学生にとっての理想の住まいを叶える、新たな商品・サービスについての提案

・「コミュニティ形成」及び「SGDs」に関する対応、部屋、共用施設などのハード面・サービス面に関する提案でも何でもよく実現可能性の高いもの

・CVコイン、CV間留学、シェアキッチン、静のコミュニケーションなど

18


まだ京都大学でも兼業で仕事をしており、今やっているのがCOI-NEXTというプロジェクトで、人材育成や社会展開部門長をやっています。京都大学ゼロカーボンバイオ産業創出による資源循環共創拠点というものがあり、少し難しい話ですが、光合成生物を活用して空気を資源化する革新的なゼロカーボン科学技術です。二酸化炭素の削減や窒素の固定化などが求められているときに、それを解決するものです。10年間にわたって23機関が参画する、100名以上の大きなプロジェクトになっています。

今年やった事例としては、京都精華大学の芸術や国際文化系の学生と連

携し、学生目線から見たときに、この研究がどう見えるのか、カーボンニュートラルについてどのように分かりやすく伝えるのかということ、芸術と科学技術がコラボレーションすることで連携をした例です。

COI-NEXT 京都大学ゼロカーボンバイオ産業創出による資源循環共創拠点の事例 (2023)

洋画 培養生活



松尾 風花 (芸術学部)

紙芝居 世界を変える



ティイベン (デザイン学部)

キャラクター がんばれ高分子ちゃん!



岡山紗也 (デザイン学部)

絵本 植物細胞とバイオのお話



ファンソネ (デザイン学部)

- ・紅色光合成細菌や植物などの光合成生物を用いて、空気を資源化する革新的なゼロカーボン科学技術
- ・光合成生物を利用した二酸化炭素や窒素の固定化技術
- ・10年間に渡り、23機関が参画し、100名以上が参加する一大プロジェクト

↓

- ・期間:2023年6月~8月
- ・受講生:6名(京都精華大学デザイン学部4名、芸術学部1名、国際文化学部1名)うち、留学生3名
- ・テーマ:「学生目線で考えるSDGsやカーボンニュートラルの企画表現案」
- ・内容:京都大学工学研究科沼田圭司教授と連携を図り、空気の資源化技術をアート・デザイン・文系視点で提案・表現
- ・効果:理系の最先端技術に触れることで、科学技術に関する洞察を深めるとともに、その気づきから新たな芸術・デザイン表現手法を考えるきっかけ
- ・サイエンス・アート展による発信

<https://iissen.kyoto-seika.ac.in/top/home/science-and-art-exhibition/>

左上は、細胞が培養されている様子を洋画の学生が描いたものです。右側は高分子のキャラクターを芸術目線で考えたらこういう表現ができるというもの。それ以外にカーボンニュートラルの話を紙芝居で表現をしてみたり、絵本で表現してみたり、そんな形のこともやっています。それを通じて理系の最先端の技術に触れることで、科学技術に関する洞察を深めるとともに、その気づきから自分たちの創作活動にもつながっていく形でコラボレーションした例もあります。

事例をいろいろ紹介しましたが、結局のところ研究支援者はさまざまな

役割が必要だと思います。一番大事だと僕が思っているのはセールスマンの役割ですが、それ以外にコンサルタント、コーディネーター、プロデューサー、プレーヤー、ファシリテーター、翻訳者とか、そのようなところで教員と社会とをつなげる役割として、すごく間に立つ人は大事だと考えています。さらにクライアントのニーズに応じたさまざまな方法論の構築が必要です。

以下では、方法論についてご紹介をさせていただきたいと思います。

まずはこれ、よくされていることですがマッチング方式です。クライアントが来て、大学と連携したいというときに、こういう研究者がいますよなど連携機会の創出や情報収集の点で有効なやり方です。これはもういろいろな形でされているかと思います。

それ以外に、今日のようなシンポジウムの方式もあります。それを通じて社会へのPRや、ここで企業の方がおられたら共同研究の探索の機会になったり、人材交流の点で有効です。

それ以外に、ワールドカフェ方式というのがあります。もともとは2014年に京都大学がダイキン工業と包括協定を結ぶということで、そのプログラムコーディネーターとして京都大学に就職しました。他の先生がメインでされていたのですが、それをバックアップさせていただく形で「100人ワールドカフェ」を開催しました。そこではダイキンから与えられた「空気」というテーマにおいて、文系や理系の教員、研究者、学生あと企業の方々が交じって800個ぐらいのキーワードを出しました。「空気」というのは文系も理系もいろいろな見方があり、そこから5つの概念を創出したということがあります。発散形式で専門分野による多様な視点を得るには、ワールドカフェの方式が有効だと考えます。

それ以外にアゴラ方式というのがあります。例えば特定の企業に対して10名近くの教員が登壇し、自分たちはこんな研究をしていると紹介する形式です。研究の概要を広く理解する点や、共同研究の探索の機会につなが

るといふ点でこういったやり方は有効です。

それ以外に、テーマ探索型ワークショップ方式というのがあります。これは文系の教員と理系の教員を組み合わせ、例えば少子高齢化というテーマの下で大学教員と企業研究者3名ずつでディスカッションを行うというものです。共同研究によって理工生物系と人社系の多様な視座でテーマを深掘りする点で、こういったやり方は有効です。

日立京大ラボのときにやったのは、研究室のヒアリング方式で、ひたすらいろいろな教員を訪問して、1人1時間程度の深いインタビューを行うものです。この現象はなぜこのように生まれてきたのかとか、そういう深掘りをしていって、歴史や宗教学、社会学、経済学など、先ほど紹介したような多様な先生方からさまざまな視点をいただいて共通項を見いだすという連携もしておりました。こんな形のやり方もあります。

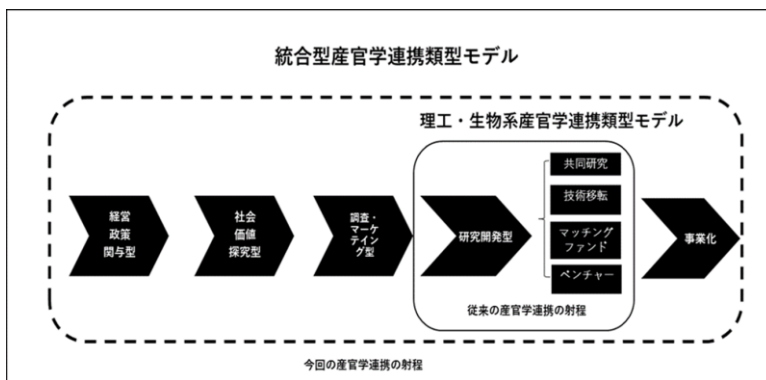
一般的によくされていることですが、講演とかコンサルティングの方式もあります。例えば企業の経営者や技術者、企画担当者向けに技術講演からロードマップ作成支援まで幅広く対応するものです。こういったところでも、人文社会系分野の視座を獲得することが期待されています。

それ以外に、コーディネーター・ミーティング方式があります。初めて大学と連携する企業からすると、大学とどう付き合ったらいいかが一番悩まれているところです。そこで、教員訪問する前に企業研究者と研究支援者がブレストをし、そこで大学の制度や研究者の紹介をする。ここの部分をさらに深めたらいいのではないのでしょうかというコンサルティングを通じて、大学教員の研究内容の把握につながるということもあります。

これまでのことを簡単にまとめますと、従来の産学連携というのは研究開発を目的に、共同研究や技術移転、マッチングファンド、ベンチャー、こういったことが中心でした。ただ企業の取締役の例とか、あとは日立やダイキンのように社会価値を探求するような例、あとは京都市の調査の例

のように、経営関与型、社会価値探究型、調査マーケティング型など、研究開発の前段階において人文社会系はすごく寄与できているんじゃないかと考えます。

統合型産官学連携モデル



Versatile(多目的・多用途) > Pinpoint
 知が源泉の社会において人文社会系分野は重要。
 量的な実証も大事だが、質的な解釈や構想も大事。

29

従来は理工系分野ばかりに目が向けられていましたが、人社系はこれだけ全部捉えられることができますよと、そういうのをもう少し理論化しているというのが今の僕の研究です。

強調したいのは、人文社会系というのは versatile な特徴があることです。今日でしたら万華鏡という表現をされていますが、多目的で多用途であると。理工系分野は特定の技術に対してこんな改良をしてほしいというピンポイントな依頼が多いのに対し、versatile な特徴があるというのが一つです。あとは、知が源泉の社会において、人社系分野は重要です。量的な実証や評価も大事ですが、質的な解釈や構想もとても大事ではないかと考えています。

■ 人社系研究のコアバリューとは 一対話の場から見えるもの

齋藤 希史／東京大学大学院人文社会科系研究科 教授、
東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター長

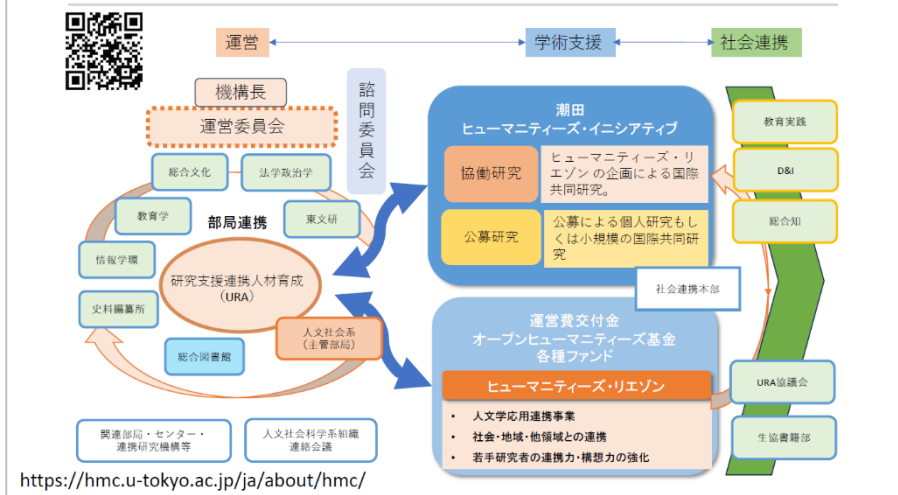
私は、東京大学の連携研究機構という仕組みの中でヒューマニティーズセンターという組織の責任者を務めさせていただいていると同時に、人文社会系研究科という、まさに人文学プロパーの研究科で教育と研究を担当しています。

また、私の専門・領域は、中国古典文学を基盤にしていますので、古いといえば古く、いかにも人文学というような領域です。おそらくそのことと、それからヒューマニティーズセンターというものの—これは私自身も企画・構想の段階から携わっていたのですが—、そのこととの間にはもしかしたら少し距離があるのかもしれませんが。しかし私自身の研究の、あるいは教育のこれまでのやってきたことというところからすると、実は割に近いところがあると自身でも考えています。つまり研究分野的な面、それは研究者としての面とも言えますが、それから組織の推進者の面と、つまり研究と組織という2つの立場から今日はコアバリューとは何だろうということをお話しさせていただければと思います。

まず、東京大学ヒューマニティーズセンターとは何かについてお話しさせていただきます。

これまでの皆さんのお話が大学の外に開いていく、あるいは国全体としてというものであったのに比べると、連携研究機構という学内的な感じで少々気後れするところもありますが、大学でもこういうことができる、大学の中でこういうことをやることにもおそらくまだ一定の意味はあるだろうということも含めて、お話できればと思います。

東京大学ヒューマニティーズセンター



連携研究機構という仕組みは、いわゆる部局—研究科や研究所などを越えて研究の連携を図ろうと始まった仕組みです。大学の外から見ると、そんなことは当たり前ではないかと、研究プロジェクトはやりたい人間が集まればいいのではないかとすることはあろうかと思いますが、大学が大きくなればなるほど、あるいは古くなればなるほどと言ってよいのでしょうか、部局の壁というものなかなか高く厚いものがあります。何かをしようというときに、その部局に分かれているということが障害になる、何か妨げになるということが少なくありません。それは教員としても、あるいは研究者としても、ときどき残念に思うことです。

そうした中で連携研究機構という仕組みは、ある研究プロジェクトを推進するためには部局の壁を越えてよいですよ。例えば私は人文社会系研究科に所属していますが、同じ東京大学であっても別の部局で何か仕事をするときには、それなりの手続きをしないとできないわけです。あるいは共同で何かをするというに、どこの部局が責任を持つのですかと。事務組

織がなければ大学は成り立たないものですから、そこでもいろいろな壁ができてしまう。それを越える仕組みをつくりましょうと。それによって研究を推進しましょうというのが趣旨です。

最初この仕組みができたときに、手を挙げたのは基本的に理系の部局が中心でした。というのは、文系の部局の研究者というのは一今日いろいろなお話をうかがって非常に面白かったのですが、やはり個人ベースが多い。自然科学系、工学系の場合であると、最初からチームでやる。そもそも大学院生になったときのラボに入るというそこから違いますよね。文系の大学院生は基本的に一人でやります。一人で自分のことをやっていくと。ときどき研究室で話したり、あるいは話さない人もいたり、あるいは先生と面談をしたり、面談に来ない学生もいたり、いろいろあるわけですが、やはり一人の時間が多い。それはむしろ一人の時間こそが学問を育てているのだという側面も確かにあるのですが、ただそれだけではないだろうということが、今日これからのお話ししていきたいと思います。いずれにしても文系のほうでは、こうした部局連携を積極的に進めていこうというモチベーションがそれほど高くないということは確かにありました。

それから、連携研究機構はファンディング、財政基盤的なものを得ることが大事なところもあり、となると、いや、それほどお金はいららないんですと言う先生がやはり多い。もちろんカミオカンデみたいのを文系でつくりたいというのはとても無理なわけですが、そういうことを考えますと、この連携研究機構という仕組みを人文社会学系で生かす道がなかなかなかったというのが実情です。

ヒューマニティーズセンターは発想の転換をしました。これは企画の段階で、プロジェクトを最初に決めなくてもいいと。「決めなくてもいい」という連携機構をつくれませんか、つくらせてくださいと、わりと無理やり

にお願いしたようなところがあるのですが、そうした仕組みにしました。

基本的に、個人研究に対する募集をかけて、まず個人研究を支援する。スライドの右側の「公募研究」というのがあるのがそれです。実は連携研究機構をつくるに当たっては資金がいらしますので、寄付金をいただいて、それでこの研究支援の仕組みにその寄付金に当てるということでつくりました。そのときにあらかじめ「〇〇の研究をやります」ということではなくて、とにかく学内の意欲ある先生を募って、それで助成を行うと。一つの方向性としては国外の研究者とコラボレーションしながら進めていく研究により多く配分しようということで、そうでない場合は、年間 50 万円の規模です。それは多分、私立大学では何もしなくても来る研究費ではないかと思います。その個人応募のプロジェクトをベースにした上で、次のステップとして協働研究を立てるという立て付けにしました。

最初のうちは、既に学内で走っている共同研究をヒューマニティーズセンターの協働研究として支援していたのですが、現在では個人の公募研究から生まれてきたつながりを、協働研究のほうへ展開していくかたちが実現できています。展開に当たっては、URA、つまり研究支援連携人材育成を一つの目的としました。連携研究機構の在り方としては、特に文系としては初めてだったと思います。人材育成とともに、個人研究から協働研究へ展開する流れを URA がつくる仕組みをつくれなかったかと思って始めたわけです。

最初は、URA (候補) は二人くらいしかいらっしやらなかったわけですが、今拡充して、ヒューマニティーズ・リエゾンというプロジェクトを立てました。「リエゾン」、つないでいくということで、人文学をつなげていくという目線で全体を見て、研究支援をチームで活動していこうという仕組みにしたわけです。

これはあくまで東京大学の中ですので、小さな話といえば小さな話ですが、このセンターには、文系の部局、特に人文学に携わっている部局が基

本的に集まっています。史料編纂所、情報学環、教育学研究科、総合文化研究科、法学政治学研究科、東洋文化研究所、人文社会系研究科ということで、人文学を扱っている教員がいるところはほぼあります。他に社会科学系で経済学研究科や社会科学研究所などの方々にも入っていただきたいと思っているのですが、今のところはヒューマニティーズということでこういう構成になっています。

こうしたまとまりの中で、中の教員たちが壁をなくして公募研究にそれぞれ応募し、年間10人弱です。それから共同研究は3~4年のスパンで行っていただきますが、今5本立っています。そうした規模でやっています。

さらに現在は、社会とのつながり・共同作業という意味での社会連携、教育実践のプロジェクト、ダイバーシティ&インクルーシブの実践もあります。それから総合知との関わりを重視していたり、あるいはデジタルヒューマニティーズについても積極的にセミナー等を行ったりしています。最近では学内の生協の書籍部と協定を結び、書籍文化を学内で推進していこうといった活動など、多方面に展開しています。

ヒューマニティーズ・リエゾンというのは、基本的に博論を完成させたくらいの若い研究者の方が中心になっていて、アイデアもここから出てきています。例えば生協との協定をやってみませんかというのも、そこからアイデアが出てきているので、若い研究者の発想が生かされているという意味では自慢できるところかと思います。ただそれが全面的に展開できているか、東京大学全体に大きな効果を十分に与えているかということ、そこはまだこれからということでもあります。

実はもう一つ、公募研究についてお話しすると、個人研究に力点を置くのだと言っても、個人研究にただ支援をしているだけでは、いわゆるアウトプットといえますか、目に見える何かというものは出てくるわけではありません。発想としては研究さえしていただければよくて、オブリケーシ

ョンはほとんどないのですが、二つだけ、最後に A4 両面くらいの実績報告書・研究報告書を出していただくということと、年に 2 回程度オープンセミナーというのをやっていただくということをお願いしました。オープンセミナーは最初対面でやっていたのですが、コロナの影響でオンラインに切り替えました。オンラインに切り替えるのは結構大変だったのですが、いったん切り替えてみると、聞いてくださる数が全然違う。気軽に見ていただける。これは申し込めば誰でも見られる。話題によっては国外からのほうが多い。例えば中国について扱ったときは国外からのほうが多いというようなこともあったりしました。オンラインにしたことで思わぬ効果があったという例の一つです。

このオープンセミナーというのが、ここに「問う個体としてのヒト」とありますが、要するに研究者がそのサンプルです。専門外の方が聞いているということは念頭に置いてくださいということは申し上げるのですが、同時に、ここでは概論をやっていただきたいのではないです、研究の現場を見せてください、先生が今何考えているのか、何をやろうと思っているのか、何を明らかにしたいのかというのを、できるだけ生の言葉で言ってください、変に薄めたり、分かりやすくしようということは考えないでください、と申し上げています。そうすると、やっぱり反応がよいです。つまりそこで何か 100%理解するとか、何かを知識を身につけようとかで来ていただいているというよりは、むしろそれをきっかけに考えたい、こういうものがあるんだということを知りたいという、そういうモチベーションでオーディエンスの方はいらっしゃるようです。

オープンセミナー：探究の集積

- 問う個体としてのヒト
- 発見が共有される社会
- 経験としての探究



<https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-seminar/>

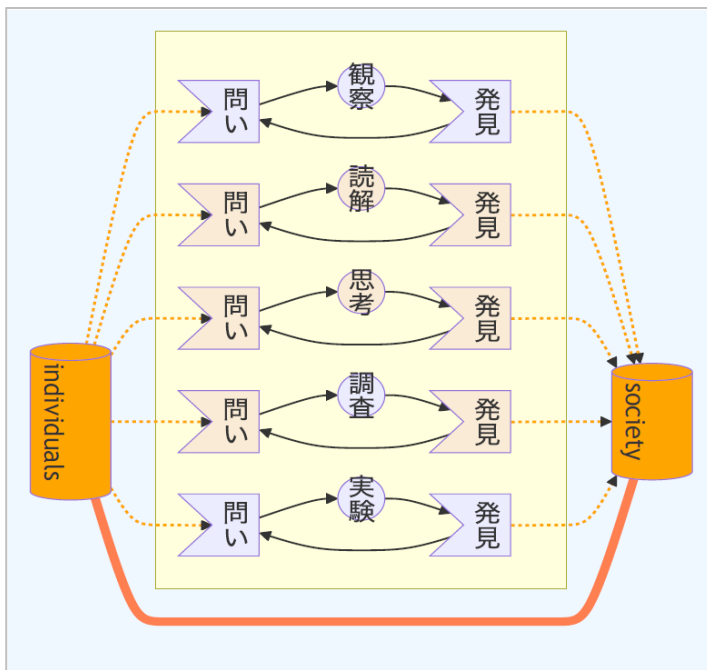


そこで私が思ったのは、それぞれの発見はやはり共有されているんだと。つまり、問いそのものはものすごく一先ほど来お話がありましたように—人文学というのは個人的です。固有と言ってもいいでしょう。それぞれの人にそれぞれの問いがあると言えると思います。けれどその発見に当たっては、それが共有されることがないといけないというか、このオープンセミナーという場ではそれが果たされているとわかったわけです。

そのときに研究とか探求というのは、人文・社会科学系だけに限らないと思いますが、これは一つの経験なのだと。一つの体験、経験あるいはエクスペリエンスと言っても同じですが、それであると。それを共有するという、最初は見せるということですね、つまり結果だけを見せるのではなくて、どういうプロセスで、何を考えてそんなことをやろうとしているのかまで含めて、いわばちょっと古い言葉になりますけど、人間臭いところを見せるというかそういうところ。理系の場合ももしかしたら大事かもしれないと思います。成果だけを見せられるのではなくて、そこに至っ

たいろいろな日常の中での気付きとか、あるいはそこへ向かおうとした動機も全部含めて、「経験としての探求」を共有することが必要なのではないかと考えています。

それが図にすると、こういうことなのかなと考えています。つまりそれぞれの問いというのは非常に個人的なものです。個人が生む問いです。これが理系の場合、自然科学系・工学系の場合は、もしかしたらここがチームである、あるいは何らかのニーズがあって実験などにいくのかもしれませんが、少なくとも私が親しんでいる分野では、問いというのはやっぱり個人に属している。あるいは親しい間の中で、これはやはりどうということなのだろうと考えたりする日常的な交流などの中で生まれるので、やはりそれはある種個人的個性を持ったものということだろうと思います。



これは、例えば哲学であれば思考して発見する。それがまた新たな問い

を生むということになっていくのだと思います。例えばよくタコつぼって言われますが。タコつぼって、要するにそのサイクルに入っちゃうことなんですよ。図で言うと四角の中のそれぞれ循環する矢印の部分です出ていかないで、発見が問いをまた生んでくれるので、学界の中ではこれでいいわけです。これをぐるぐる回っている。皆さんぐるぐる回っている状態で、研究そのものは成り立っているわけです。自己運動してしまうんですね。この発見をどうやって共有するかということが、これからやはり必要なのではないかと。実は役に立つとか役に立たないとかを考える前に、まず共有してみるとどうなるか。実はそこから何か出てくるだろうとわりと楽観的に考えています。

そういった考え方を一つベースにして、先ほど申し上げたヒューマニティーズ・リエゾン、いわば研究支援がどうあるべきなのだろうかと考えたときに、やはり人文系あるいは社会科学系も基本そうだと思いますが、個人研究あるいは少人数の研究を最大限に生かす。つまりある何か大きな題目があって、それを分担するのではなくて、まず個人研究、固有の研究というものを最大限に生かす。これは研究者の力を付けていく意味でも多分重要なのだらうと思います。

それから同時に、対話の場も必ずつくるといことです。いろいろな対話があると思います。もちろん研究者同士の対話もありますが、先ほどのオープンセミナーは学内や研究者の方が半分くらい。例えば、東京大学の場合には、1年生の前半ぐらいまでは教養学部で学んで、それから各専門へ進みます。どの専門に行こうかと考える学生が結構多いわけですが、そのときに、教養学部において教えていらっしゃる先生方のことは分かるけれど、そうではない先生方のことは分からないので、どんな雰囲気を知るのにオープンセミナーを活用されることが結構あります。学生との対話でもある。それからもちろんそうではない方々がこのオープンセミナーには割

と参加してくださっています。出版社、編集者の方が加わってくださることもあります。そういう意味での開かれた場をつくるということ。

ヒューマニティーズ・リエゾン

- ・ 個人研究を最大限に生かす
- ・ 対話の場を作る
- ・ テーブルを囲む：問いをつなげる
- ・ テーブルに載せる：発見をつなげる
- ・ 探求を共有し支援する



ここに「テーブルを囲む」と「テーブルに載せる」と書きました。前者は問いをつなげる、同じテーブルを囲むことで自分が何を考えているのかというのを伝え合う。後者、テーブルに載せるというのは、自分が得たものは何かをテーブルの上に載せていく、そういうイメージでやっていければなど考えています。

「探求を共有し支援する」というのは、研究支援人材という言い方をよくされますが、でもそれは支援するだけではなくて、先ほど「伴走」という話があり大変共感しましたが、ともに探求していく。「探求を共有」の「共有」というのが、先ほど申し上げた経験です。多分伴走というのは経験を共有していくことだと思います。何か注文して、注文した結果が出てくるのを待っているのではなく、実際にその作られている現場と一緒にいることがとても大事で、それは研究者の最初のスタートに立っている人たちに

とっては、なおさら大事ではないかと思えます。

研究支援人材のキャリアを考えたときに、しばしば支援のほうへ行くのか、それとも研究者に行くのかの二者択一が問題になることがあるように聞きますが、それは両立し得るし、ある場面では支援のほうにまわり、ある場面では研究者として振る舞うのでいいのではないか。私自身も今やっている組織運営の仕事というのは、ある意味では支援人材としてやっていることになりました。

もう一つ、それを技法化したらどうなるか、も考えています。研究の共有の技法です。先ほどの固有性を可視化することは、研究者自身もよく分かっている、自分の問いの固有性がどこにあるのかは分かっていることが多いです。ですので、それを外部の視点で可視化する。それからその上で相互につなげることが最初のプロセスになります。

問いを連携した場合にどういう展望が開けるか、どういう普遍性を獲得できるか、展望する。これが多分次のプロセスだろうと思います。その上で、資金獲得のための計画ができる。そのうえで、さらに新たな発見を共有する。

そういう中で、今、私たちが5つ進めている共同研究があります。上は「顔」、顔は何を語るのか。これはいろいろな問題が出てきます。理系を文系もひっくるめて、心理学や美術史、文学の問題も当然出てきます。人はなぜ顔で判断するんだろうというところは、素朴な問題・問いとしてあり、それをみんなが共有してプロジェクトを立ち上げたものです。大変面白いです。

下にあるのは、アジアの都市におけるノスタルジアの問題です。その下にあるのは、福島の大葉町で行われている教育実践の問題です。これはものすごく現実、現在の状況と関わっています。

協働研究の技法

- 問い＝固有性を可視化する
- 問いを相互につなげる
- 連携された問いによる発見の普遍性を展望する
- 組織と基盤とプロセスを計画する
- 新たな発見を共有する

「雨」は何を語るのか——過去から未来へ

研究代表 永井 久美子(総合文化研究科)
研究分担者 高岸 輝(人文社会系研究科)、横谷 真弓(総合文化研究科)、鈴木 美奈(人文社会系研究科)、出口 智之(総合文化研究科)、中村 実(文学部言語学)、宮原 真智子(HAC特任研究員)、水野 穂太(HAC特任研究員)
学術研究協力者 平塚 正彦(女子文化情報学)

詳細はこちら ▶



アジアの都市におけるノスタルジアの表出と文化遺産の創出

研究代表 松田 雅(人文社会系研究科)
研究分担者 池田 雅(文学文化研究科)、本田 洋(人文社会系研究科)、池田 保志(人文社会系研究科)、和田 真生(HAC特任研究員)、高木 聖(HAC特任研究員)
研究協力者 室 聖(文学文化研究科)、藤野真(総合文化研究科)、LEE Kam-Hui(人文社会系研究科)、藤谷 泰平(人文社会系研究科)、青木 麗(人文社会系研究科)

詳細はこちら ▶

フルインクループな学校作りへの挑戦：福島県双葉町での実践

研究代表 大野 雅(教育学研究科)
研究分担者 横谷 真弓(総合文化研究科)、山名 淳(情報学)、ライラ・カセム(総合文化研究科)、中島 麗三(HAC特任研究員)

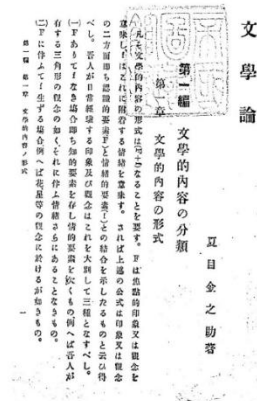
詳細はこちら ▶

<https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/collaborative-research/>

最後に、コアバリューということが何かということについてお話ししなければいけないということで、私なりに考えてみました。繰り返しになりますが、発見の普遍性と問いの固有性を基本にして考えると、命題とモダリティというのは言語学の概念で、日本語の文法は最近こういう言い方を分析することがよくあります。例えば「雨が降る」というのは、これは命題であるとして、モダリティというのは「雨が降るだろう」「雨が降ってほしい」「雨が降るべきだ」という文にはモダリティが加わっています。大雑把に言えば、ですが。つまり、その何らかの事象に対して意思が働くとか、判断が働くとか、希望が働くとかという部分、実は人文・社会科学がやっていることは、そのモダリティの部分なのではないか。それは問いの固有性というものと関わっているのではないか。

コア・バリューの可視化

- 発見の普遍性と問いの固有性
 - 命題とモダリティ
 - 夏目漱石『文学論』の(F+f)
- 探究を駆動するものへの意識
- ヒトと社会を方向づける意志



それから、夏目漱石の『文学論』というのがあります。研究者の間では割と注目されますが、一般には読みにくいということで評判があまり良くないですけれども。この「F+f」というのは、要するに大きいFは事実とか事象とか、目に見える客観的なことで、言語化しやすいもの。小さいfは、心情に属する部分であるといったことを独自の原理として理論を組み立て、主張して、『文学論』というのを立てるわけです。ただ、結局あまり受けなかったのだから（かどうかはわかりませんが）、この後は小説に専念します。

これは今日の日からすると、人文知的な見方だと思うのです。事実的なものと、プラス何かがあって世界は成立しているのだと。そして、このもうプラスの部分というのが実は探求を駆動しているのではないかと思います。ニーズベースだと言われているものでも、聞いてみると、どこかから言われたからやっているというよりも、自分自身が持っている興味と実は

つながっている。

そしてそれこそが人と社会を方向付ける意志と関わっているのではないのでしょうか。つまり、研究者はこういう方向で探求をしたいと考えているということは、研究者も社会の一員、あるいは探求する存在としてのヒトであって、そのヒトとしてあるいは社会の一員としての研究者がどこへ向きたいかということ、実はこの探求のプロセスはよく表しているのではないのでしょうか。コアバリューとは、大文字の F ではなく小文字の f にこそ見いだせるのではないか。しかも、一人でやっているだけでは、いわば自律運動化していますので、やはり、他者との対話によって気づかされ、浮かび上がってくるのではないだろうか、といったことを考えている次第です。

パネルディスカッション

一人社系研究のコアバリューを引き出すアプローチとは

モデレーター：西村 勇哉／株式会社エッセンス 代表取締役、
NPO 法人ミラック代表理事

西村：パネルディスカッションの進行をさせていただきます西村です。ミラックという NPO と、エッセンスという研究者を社会につなぐことをミッションにしている会社の運営をしています。よろしくお願いいたします。

今日のお昼からずっとお話をうかがっていて、僕の中でいくつか扱いたいトピックがあります。そのうちの一つ目が柳澤先生が途中でおっしゃられていた「人文学というのはより手前のところから考えるというところがあるのではないか」という部分、とても共感するところで、最終的にどう生かせるのかというのはあるのですが、やはり人文学ってどこまで戻っていけるのかというところによさがあると思います。

一方で、今の例えば企業社会みたいな文脈では、戻すよりも早く進めることが求められるのかと思っています。なので、手前に戻すと言っても、そんなに手前に戻させてもらえないこともあるのではないかと。そこで、まずは柳澤先生にうかがっていききたいと思います。

そして、そのあと皆さんにもうかがいたいのが、人文のコアバリューをこのあと考えていく中で、本来起こすべき人文系の研究とは、当事者からするとどういうものなのだろうかと。本当はもっとこういう研究をしたい、もっとこういう在り方で研究に当たっていききたいという理想像を、まず柳澤先生にうかがいたいなと思いますが、いかがでしょう。

柳澤：とても重要な点に共感いただいて、嬉しく思っています。質問についての質問になってしまうのですが、その場合は、現状はやっぱり何か不十

分で、それをもっとこういう理想的な状態にしたいという形で捉えるということでしょうか。

西村:いや、前提も外していただいて大丈夫です。

柳澤:人文科学の研究自体は、脈々と、もともとの諸々の条件を問うところからの研究自体は続いていると思います。自分もそこに従事しているとは考えるのですが。

しかし、まさに言っていたように、キーワードが与えられてしまっていることがすごく多いということ。また、齋藤先生のお話を聞きながら考えていたのですが、まさに人文科学の研究では問いを持つことが非常に重要なのですが、その問い自体が、そもそもの私たちが今いる情報的な環境から言っても似通ってしまいがちなことは否めないですよ。例えば私が we-ness について考えていたら、京大でもそういう科研費のプロジェクトが立ち上がっていたとか、昨今の日本のケアブームなどにも顕著なわけですが。そのように研究が集中することこそが同時代的な問題関心であるということももちろん言えると思います。

ただこれだけインターネットによって常に情報にさらされ、フィルターバブルもあり、個人の独自性が揺らいでいるような状況で、もし人文科学のコアバリューが個人の問いということになると自戒も込めてですが、もっと本当に時間をかけて全く違う発想を自分自身で探索していけるような努力をしない限り、結局同じような話に落ちていく危険性はすごくあると思います。正直なところ。

ではどうすればいいのかというのは、研究者自身ももちろん考えなければいけないことです。単に情報をシャットアウトすればいいという問題でもないので、今のような問題意識を研究者同士、企業や大学が共有して、ニーズや流行ではなく、問い自身の強度というか、全く違う発想や実験的

な探究こそ評価しようという姿勢を共有する必要があると今回参加させていただいて改めて思いました。

西村: 齋藤先生にうかがいたいと思います。

先ほどのお話の中で、個人研究を最大限生かす、あえて最大限ということ強調されていたと思うのですが、おそらく少し生かせばいいのではなく最大限生かさないと突破できないところがあり、そこを突破することが人文系の一つの価値なのだろうと思いました。今の問いの話もそうですし、何かもう一息突破をするというときに、一体どのような環境やどのような行動が必要になってくるとお考えでしょうか。

齋藤: 実はヒューマニティーズセンターを立ち上げたときに、研究費を配分する一つの要件としてサバティカルを取っていただきたいということを考えたんです。サバティカルを取るのが義務ではないですが、サバティカルを取って申し込んでくださったら優先しますという形でやったのですが、実はほとんどいらっしやいませんでした。これはもう東京大学のシステムが悪いとしか言いようがないと、今ここで言いますけれども。

つまり、何年間か勤めないとサバティカルは取れない、自由に取れないんです。多くの部局では前借りもできない。そうすると、自分の研究のペースに合わせてサバティカルを取るというよりも、何年経ったからサバティカルを取るような感じになっています。私は、サバティカルを取ることが、自分の研究を深めるというのでは一つ大きなことで、もっとサバティカルを取るべきだと思っています。

もう一つは、やっぱり現代的な文脈では通じない世界のことにに関する研究がもっとあっていいのではないかという感じがします。私自身は中国古典をやっているのですが、古文・漢文は不要論などへの反論を求められることがあるのですが、現代の知恵としても古典は有効だ、という意見とは別に、

それは全然違う世界を知るためにこそ古典は有効なのではないか、主張としてはあるかと考えています。

西村:一応確認としてうかがおうと思ったのが、サバティカルを取るというのは、普段考えているような思考プロセスを一回止める必要があるということですか。

齋藤:ええ。そういうサバティカルを取るべきだと。たまった原稿を処理するのではなくて。

西村:文脈を一度断ち切るわけではないかもしれないけれど、何かやはり変える必要があるということ。

岡田さんにも少しかがってみたいのですが、デサイロのグラントの在り方はすごく工夫をされていると感じました。どんな成果が出るのですかみたいなことからは始めるのではなく、一体何が起こるか分からないけれども、この人とこういうことをやったら面白いんじゃないかという余地があるなど。岡田さんがグラントをデザインする中で、工夫されていた点や、1年ぐらい運用されている中で、実際には何が起こってきたのかについて、今のお二人のお話と少し接続しながらうかがいたいと思うんですが、いかがですか。

岡田:今のお二人の話をうかがっていて、デサイロとして難しいなと思うのは、デサイロのインキュベーションプログラムも申請基準を設けていて、その一つ目が「時代と社会への応答」なんです。その「応答」というのは、その知見をすぐ社会に還元して事業に生きるという意味での応答というより、もう少し広い解釈での応答ではあるのですが。先ほど柳澤さんからあった「同時代的な問題関心が発生している」ことはいいことでもあるし、

もしかするとその固有性が欠け落ちているのではないかという話もあったと思いますが、どちらかというと同時代的な問題関心が生まれていることを肯定する基準ではあります。

本来的には、もっと固有な問いのようなものから立ち上がってくる研究を支援できるほうが良いとは思っていますが、とはいえ資金が限られている側面もあります。まずはデサイロとして支援する研究者の皆さんの研究を通じて、人社系の研究の魅力を社会にプレゼンテーションしていくことをやらなければならない。そう考えたときに、どうしても時代と社会の応答というところを置かないと、まず始められない部分がありました。そこは、お二人の話をうかがっていて、葛藤を感じたところではあります。

西村:もう1回齋藤先生に戻ろうと思うのですが、固有の問いの話で。概念を問い直す、認識を変えていくことだと思っていますが、認識を変えていくことほど世の中の役に立つことはないと思っています。つまり、認識が変わったから新しいものが生まれるのであって、新しいものが生まれたから認識が変わるわけではないと思うんですね。そのときに認識を変えるぐらいの強度のある問いという、そういった固有な問いというのはどうやって生まれてくるのだろうかという、問いの固有性についてもうかがいたいなと。

齋藤:先ほどもお話ししたことですが、やはり対話というのがすごく大事なのではないかと思います。一人の頭の中からそれが出てくるというものではないと思うんですね。

実は岡田さんが言われるように時代と結ぶというところでも、対話によって深まる部分が絶対にあるだろうと思います。あるいは先ほど申し上げた古典で言えば、本と付き合うことによって深められる、認識を改められるということがあると思うんですね。ですからサバティカルも一つの方法

ですし、自分の問いを深める技法というものを研究者自身が身に付けていく必要がやはりあるのではないかと。支援だけ要請するのではなく、その深まりに応じて反応していただけるのではないかと、応答していただけるのではないかとという気持ちが私にはあります。

西村:ちなみに「対話」にあまりまだ親しみのない方もいらっしゃるかもしれないので、話したらいいのだろうかと思って思われたときに、いや、そうではなくて、できたらこういうシチュエーション、こういうことができるとそれはいい方向に行っているのではないかと、その対話の在り方についても少しコメントをいただけますか。

齋藤:そうですね。いろいろな方法があると思いますが、私が多分一番なじんでいる方法は、ある書物なりある人物なりについて徹底的に考えるというのが一つの方法だろうと思います。それを徹底的に読み込んで、あるいは人物であればその人物のA to Zを全部知る、どういうふうに生きてきたのかを知るということで。現実の問題であれば、現実の問題を自分と全然違う立場で関わっている人、自分と遠い人と話すという、それが一つの方法ではないかなと思います。

西村:南先生にもうかがおうと思います。先ほどの発表を非常に興味深くうかがっていたのですが、人文系の産学連携、特に企業の中での役割が増えてきているというようなお話がありました。法学、経営学、経済学といったところが求められ始めているということですが、一步踏み込んで、例えば文学であるとか人類学であるとか哲学であるとか、ある種よりよく分からないもの—ちなみに僕は人類学が専門で、いいと思ってやっていますが—よく分からないものを、企業の方と産学連携に持ち込めるとしたら、どのような可能性があったり、もしくは実際に調査されている中でそ

うしたものがあったりするのでしょうか。

南:人文学の知識が企業においてどう活用できるかということですよね。実際、大手企業であればあるほど最近よく聞くのは、将来何をしたらよいか分からないと。これだけいろいろな産業が生まれ、日本の立ち位置もすごく低くなっている中で、将来のビジョンが描けないと。自社の中では文系の発想というのを全然持ち合わせていなくて、とりあえずキャッチアップ型で今までやってきたけれど、自分たちで新しく先導しないとしないときに、どうしたらいいか分からないと。そうしたときに、やはり哲学でもそうですし、人類学でもそうですし、構想を描けるというところ。将来何したらいいか分からないというところで、こんな視点があるよ、歴史学で言ったら過去にはこうしたものがあつたよというものを提供できるところに対して、期待しているところは実際あります。そういうところで、人文学というのはすごく寄与できる点だと思います。

西村:実際に、そうした一少し軽い言葉を使うとニーズみたいなものは、起こったり増えてきたりしているものなのでしょうか。

南:そうですね。前職の京都大学のときに、主に包括協定を結んでいる大企業先は、必ずそうした問いがありました。せっかく大学と連携をするのであれば、今の身近な技術的な課題の解決も必要だけれど、将来見据えていることも含めていろいろと考えていきたいというニーズはありました。

西村:それは面白いですね。企業の人というと、割と分かりやすいというか、ソリューション、解決策を求めているようなイメージもあつたのですが、解決策だけではないんですね。

南:そうですね。例えばある企業が言われていたのは、将来どうなるかという話をコンサル会社にも投げたけれど、結局、同じようなテンプレートでしか返ってこない。それに対して、大学の場合は全然見当外れかもしれないけれどもユニークな視点を得られるかもしれない。そうした視点も含めて、人文系というのは全然意味がないものではなく、企業や社会に対してもすごく重要なものだと思っています。

西村:では岡田さんに聞いて、小宮さんに聞こうかなと。

岡田さん、もともと『WIRED』日本版にいらっしやったので、どちらかという与企业人向けに先端的な技術や新しいソリューションを紹介するところに近い立場だったと思いますが、そこから人文のほうにデザインという形で動かされた。今の南先生のお話もうかがってなのですが、技術とは違う解決や可能性を十分に感じられたのかなと思うのですが、今日のテーマのコアバリューというところから考えたときに、何が技術的なものや課題解決的なものとは違う価値だと思われたのでしょうか。

岡田:いくつかの視点があります。まず、『WIRED』日本版はデジタルテクノロジーや技術に関するメディアと思われがちなのですが、それらが人々のライフスタイルや社会に与える影響を考えるメディアなんです。

その際、人文知やサイエンス・フィクション、アートなどを拠り所にすることがあり、わたし自身も人社系の研究者の皆さんとご一緒する機会が多かったんです。それは先ほどの西村さんの認識の変容といった話ともつながってきます。

例えば僕がご一緒した戸谷洋志先生は、20世紀の哲学者のハンス・ヨナスの研究をされているのですが、将来世代への責任というものを研究されていまして。今、デジタルテクノロジーや気候変動など、自分が亡くなった後の世代にも現在世代の活動が大きな影響を与える時代を生きていると

思います。そうした時代のなかで、「将来世代への責任」という考え方を一人ひとりがもし持ったとしたら、その行動も変わっていくだろうと。なので、テクノロジーについて考える際も、人文知を頼りにその未来を考えたい側面が多くあるんです。

先ほどの南先生の「構想する」というところで考えたポイントがひとつあります。編集やメディアの果たせる役割のひとつは、社会を捉えるアングルを提示することだと思っています。『WIRED』においても、雑誌の特集テーマというのは社会を見るアングルを提示する行為だと思っています。これは僕個人の見解ですが、ここ数年だんだんと社会をどのようなアングルから捉えたらいいのか分からなくなってきてしまったところがあって。そのような背景もあり、デザイロの第1期の研究プロジェクトでは「いま私たちはどのような時代を生きているのか」を研究者のみなさんと考えていきたいと思ったんです。自分がわからないからこそ、皆さんのお知恵をお借りしたところがあるんです。

西村:小宮さんにもうかがっていきこうと思います。人文のコアバリューの片鱗が少し見えてきているかなと思うのですが、JSTのようなファンディングエージェンシーとそこが接続するために、どこが埋まっていくとよりよい接続になるのでしょうか。実はもっとこういう取り組みがあるので、JSTとしてもっとこれを知ってもらえるといいというものもあるかもしれません。もしくは、今からこういうことを考えようとしているので一緒に考える、そういうテーマだけはあるけれどまだ決まってないことがあって一緒にできるということもあるかもしれない。もしくは、今すでにされている取り組みの中で、少し変えればはまるということもあるかもしれないですが。

僕はJSTについてすごく詳しいわけではなく、端々を少し知っているだけなので、今のお話とファンディングエージェンシーとしてのJSTはどう

すればいい接続になっていくのかというときに、小宮さんはどう思われますか。

小宮:今のお話とどういう形でつながるかは分からないのですが、一つは我々が研究開発領域のテーマを立てるときに、いろいろな有識者の方に関わっていただくんです。そのときに、今までお話があった問いを立てる力とか、あと切り口ですね。同じ社会問題であっても、一つ上のレイヤーの切り口で物事を考えると、例えば今まで参画できなかった人たちにキーワードが刺さって、全然分野が違うから自分とは関係ないと思っていたような先生たちが入ってきやすくなったりします。それはファンディングを立てるときのキーワードや、ものの見方だと思うのですが、そういうところのアイデアや発想が—それは別に人文社会の先生に限ったことではないかもしれないですが—もしかしたら人文社会の強みみたいところかもしれないと思いました。

あと批判することという話も、柳澤さんのお話で「ウェルビーイングとみんな言っているけどそれってどうなの」とか、1回立ち止まってという話は、私も本当にそうだと思っていて。Society5.0なども同じようなことがもしかしたら言えるかもしれません。そこと、新しい価値を提供するというのは、全く同じではないかもしれないのですが、批判から新しい価値が生まれてくるというポジティブな面をもう少し出していけると、人文社会の価値が認知されることにつながるのかなと感じました。

西村:今、僕の中で二つどちらを聞かかという道があるのですが、どちらも面白そうなんだけれども。柳澤先生にしばらく聞いてもらっているので、柳澤先生に聞けるほうに振ろうかなと今思っています。

テーマを設定する段階で、人文の方々の捉えているアングルや視点みたいなものが生きてくるのではないかと、そんなお話を今小宮さんにしてい

ただいたかなと思っています。一つはそのもの自体を扱おうかと思って、これはまた齋藤先生に聞かないといけないなと思ったのですが、いや、そうではなくて柳澤さんに、「私だったらそもそもこういうテーマを置きたいです」というようなテーマ、どんなものだろうというのを聞いてみたいなど。やはり社会側から要請されるテーマと、研究者の固有的なテーマとまた違うと思うので。柳澤先生だったらどういうのを出すのかというのが、その違いをビビットに出してくれるのではないかと考えていますが、いかがでしょう。

柳澤:端的に言うと、私自身は宗教の研究、宗教思想の研究をしているわけですが、宗教のことを考えてもらうためにアウトリーチしている部分での仕事が増えてしまうというジレンマがあります。

例えば、今研究上一番関心を持っているのはキリスト教右派なんですね。一番メディアに出ている部分ですとアメリカでトランプを支持しているキリスト教右派は見たことがある方も多いかもかもしれません。実は同じ教派は日本にも入っていて、増えていまして、アメリカのキリスト教右派と同じ部分と異なっている点があって面白いんですね。ただこの面白さを伝えるためにはたくさんの前提を説明しないとイケません。キリスト教である、しかもその中の右派、福音派となると、日本だと「あ、知らない、知らない」となってしまいます。

社会の中ではもしかしたらマージナライズされているものかもしれないけれども、実は相当時代を映していると思われる現象というのが明らかにあります。それが私にとっては日本のキリスト教右派なんですが、ただ、それを見つけるには時間がかかることですし、今私がここで、その研究の話をして、前提がある話なので、すぐ面白いって思ってもらえないだろうという構えがあるんですね。

研究資金をいただく場合には、社会のニーズ筆頭にいろいろなアウトリ

一ちの可能性を考えざるを得ない。それは、研究者として当然やるべきことで、社会に還元するということだと思うのですが。ただ多分、本当に面白いことというのは、まだよくわからないものの中にありますよね。研究の醍醐味はやはりそこにあると思います。

ご質問にダイレクトに答えられているか分からないのですが、そうした研究されるべき対象を見つけるためには、繰り返しますが、時間もかかる上に、アウトプットも即座に分かりやすい形では提示できません。しかしそういう誰もやってない研究にたどり着くのは研究の醍醐味なので、それを研究者はやっていきたいのではないかと、私は研究者を代表しているわけではないですけども思います。

西村:構えるという感じも、すごく僕は共感はするところです。僕のやることを今この場でしゃべっても、誰も興味を持たないだろうと思うので、かなり丸めて相当面白そうに話さないといけない。でも本当はそこじゃない、だからもういいか、後でゆっくり考えようみたいな感じになるんですけど。

少し切り出そうと思ったのは、時間がかかるというところ。テーマさえ見れば、もしかしたらそこから早いかもしれないけど、テーマが見えるまでに10年かかるかもしれないし、40年かかるかもしれないという。もしかしたら、ないかもしれないということをされていると思うんですよ。見つかったときにそれはすごい。けれど、見つかることを求めているというよりも、多分どちらでも楽しいからされているような気がします。

柳澤:そういう研究—いわゆる「探索的」ということだと思うのですが—が、アカデミズム全体の発展のためには大事だと思います。最近は、いろいろな学会でそういう探索的な状態のものも発表してよかったり、例えば実際に実験してみて仮説通りの結果が得られなかったという発表も成果にして

いいなど、学会のほうでも努力はされていると思います。

西村: さっきの南先生の話で、まさにそういう態度を取るやり方が、企業が求めているところでもあるのかなど。ぱっと答えを出すのではなく、分からないながらに探索していくというのが、どういうことなのだろうと。企業として、ただフレームが欲しい、問いを投げてほしいだけではなくて、アプローチの部分についてのニーズについてはいかがでしょうか。

南: アプローチのニーズ、文系の教員でどういうふうなアプローチの仕方を企業が求めているかということですね。

西村: 長い時間をかけてでも分からないことに向かっていくような。

南: 例えば京大のときに日立製作所とやった際は、2050年の大学と企業の在り方というところで、例えばローマ史をやっている先生、心理学をやっている先生、哲学をやっている先生など、いろいろなところから当たると、それぞれの研究者によって時間軸が違いますよね。ヒアリングする日立側もその専門性が変わってくるので、なかなか最初コミュニケーションがうまく取れないわけです。

そこで、例えば、こちらが間に入ってという方法もあると思います。もしくは、そこを通じて仲良くなって、日立の人と京都大学の先生が共同研究をやったり学会で発表したり、同じ言語のベースになっていくフェーズがあります。研究個別でそれぞれ捉えていかないと、間に立つ人間がこの先生はこういう考え方だということまで理解しておかないと、企業に対しては紹介できないなと思いました。

西村: 少し話題が変わってしまうかもしれませんが、齋藤先生、岡田さん、

小宮さんにうかがいたいのが、柳澤先生がプレゼンテーションの中で、続けていくことがやはり必要で、どうやっていこうという話をされていました。コアバリューを引き出すという意味では、継続していくためにどのような仕組みや状況をつくっていく必要があるだろうかということ、うかがえればと思います。

すでにごプレゼンテーションで言われていることもたくさんあったので、そこではなかったこと、もしくはお話しきれなかった具体的な部分についてうかがいたいです、齋藤先生からいかがでしょうか。

齋藤: だいたいプレゼンで話してしまったような気もするのですが、探求のモチベーションということなのかなと思います。探求のモチベーションをどうやってつくっていくのか。その障害物というのはもう山のようにあるわけですね。大学という空間であれ、あるいはそれ以外の空間では一層そうかもしれませんし。探求というのは、むしろ社会生活に対しては逆効果があるようなところがある、それを継続するということになるかと思っています。

研究者によってタイプが違いますが、私自身は、やはりオープンセミナーなどで誰か一人でも聞いている。例えば教室に学生さんが 50 人いて、一人わかってくれればいいというタイプの授業もあっていい、とってはいます。一般的にはそれではまずいのですが、ただ、姿勢として、例えば本を書いて、誰か一人分かってくれればいい、それも現在でなくてもいい、10 年後、20 年後に拾って読んでくれればそれでいいといった、そうしたところを自分自身に持てるかどうか、モチベーションにも大きく関わると思います。

その意味では、サポート。教員もサポーターだと思うので、教員、あるいはメンターの役割はやはり大きい。キャリアの浅いうちは不安に駆られますので、適切にアドバイスしつつ、大丈夫、聞いてくれる人は必ずいる

からと繰り返すことが必要なのではないかという気はします。必ずしも教員でなくてもよくて、あるいは支援するというのは財政面だけではなく、そういうことかなという気はしています。

西村:岡田さん、いかがですか。

岡田:二つの観点があります。先ほどとも重複する部分はあるのですが、あらゆる活動は誰のどんなお金を受け取ってつくるかによって、活動の自由度は決まりますよね。デサイロの場合は、とても幸運なことに、久能さんのインパクトファンドから大きな額を寄付いただいたところから始まっているので、そういう柔軟な資金になるべく近いものを今後も調達していくことができれば、例えばすぐに成果を求めるのではないものに、きちんと支援させていただけると思います。どういう柔軟な資金を集めていくのかに挑戦していかなければなりません。

もうひとつが、研究者の方々の探求のプロセスのなかで生まれてくる価値というのは、ものすごくあると思っています。その価値を、私たちのような存在が出力先を変え、実はこんなふうには社会の潮流や課題、関心とつながるのではないかということ、伴走支援する中でサジェストする役割ができないかと思っています。それは、こちらのフレームで研究自体の一部分を切り取ることになってしまうかもしれないですが、そのプロセスから出たものを還元していく。ご本人が取り組まなくてよくて、我々みたいな存在がそれをやることが重要ではないかと思っています。

西村:まさに編集者としての立場ということですね。小宮さん、いかがでしょうか。

小宮:ファンディングエージェンシーの立場からすると、1回プロジェクト

として採択すると、平均3年半くらいの研究期間でいったん終わるというのがスタンダードです。そのときに、良く議論になることが、二つあります。研究活動を継続いただいたほうが、よりいい研究に発展するし、成果も出る可能性があるだろうけれど、3年半で区切らないといけない。何とかシームレスに、柔軟にできないかというところは一つあります。

もう一つは、そこでせっかく出てきた成果は必ずしも同じ先生が続けるだけではなくて、先ほどプレゼンの中でも「プロトタイプをつくるところまでです」という話をしましたが、そのあと、きちんと社会に実装するつなぎの部分是谁がどうやるのかは、すごく難しい。その成果や、あるいはそこでできたネットワーク、ノウハウをきちんと次につなげていく、生かしていくというところは非常に重要ですが、十分にできていない部分かなとは思います。

西村:そうですね。先ほど齋藤先生のお話も、一人でも、ということがありました。その一人が出てきてくれると嬉しいので、その人に伝わるような何かブリッジが起こるとそれは非常に喜ばしい。それをどうやってやるのかは、ある種外周というか、私たちみたいな少し外側で関わる人たちの役割なのかなと聞きながら思いました。

あとお二人、南先生と柳澤先生に最後、今回のコアバリューを引き出すアプローチということで、こういったことを周辺の人たちがやってくれるとより研究者のコアバリューが引き出されるのではないかと、コメントを最後にいただければと思います。南先生いかがでしょうか。

南:いろいろな大学で言われていることですが、厳しい社会状況や、お金がないといった事情があり、興味関心を通じた科学研究がなかなかやりにくい環境にあります。やはり研究者の得意なところと不得意なところがあるので、その不得意なところを補うのが間に立つ人の仕事だと思います。一

番は、やはり営業だと僕は思っています。外部にお金を取りに行くなど、その先生の環境整備をするためにはそこを徹底的にやるのが研究支援者の中で求められていることかなと思っています。

ただその研究支援者の中でも、同じように研究ばかりをやってしまうような人もいますので、やはり常に社会に目を向けながらそういう活動をするのが、僕自身は大事だと思っています。

西村:柳澤先生お願いします。

柳澤:社会がだんだんいろいろなことを許さなくなっているというのは本当にそのとおりで。私は研究者なので非常に理想的なことを言うしかないし、言わせていただければと思います。例えばスキームがあるけれど延長するというお話も、とてもいいなと思いつつ、なんて贅沢なことだろうと自戒している自分もいて。私は私立大学なので研究費がある程度付いていても、夫は国立大学なのでいろいろ苦勞していることなども見ています。何とかしてこの節約的な空気を変えていく形で、贅沢だって思わない形で皆が活動していける—それは本当に研究のみならずだと思いたすが—そういうものを連携して醸成していくようなことが何とかできないかなと、少し理想論ですが、そういうことを思いました。

西村:ありがとうございます。

このセッションはもう時間ですが、「人社系研究のコアバリューを引き出すアプローチ」というタイトルをいただきまして、打ち合わせをしたときにどうしようと思ったのですが、登壇者の皆さまが、ある種全く違う立場でそれぞれの考え方をおっしゃってくださって、それがそこまでの大きなハレーションを起こしていないというのは僕の中では少し希望で。全然違う立場だけれど、一緒になって考えていける余地が十分にあると感じまし

たし、ということは具体的な何か一歩というものも、それが得意な人が生み出したり始めてくれるのではないかと思いました。自分は人類学をやっていますと言いましたが、本当はどれだけ役に立つか声を大にして言いたいわけですが、なかなか伝わらないところもある。それが何か伝わっていく社会になることで、社会側にも還元が起こる。そういう循環が人社系の研究から起こっていくといいなと改めて思った次第です。

ということで、このセッションはここで終わりたいと思います。改めまして登壇いただきました齋藤先生、南先生、柳澤先生、そして岡田さんと小宮さんに拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。

閉会挨拶

大橋 弘／東京大学副学長

本日は大変長い時間、年度末のお忙しいところを第9回人文・社会科学
研究推進フォーラムにご参加いただきまして誠にありがとうございました。
現地で90名、オンラインで140名を超える皆さまにご参加いただいたと
聞いています。

本日は人文社会科学研究のコアバリューを引き出すアプローチ、ファンテ
ィングエージェンシーに関する実践、ソーシャルセクターへの伴走支援の
実践、産学連携の実践、アカデミア自身の実践と多様な視点でお話をうか
がったということで、私は齋藤先生のところからの参加で前半うかがえな
くて残念だったのですが、いろいろ思うところがあって大変勉強になった
次第です。

ちなみに、私の専門は経済学なので、そういう意味では社会科学の人間
です。副学長の担当は人文・社会科学組織連携とあって、人文・社会科学
のとりまとめと産学協創ということで、産業と大学とで連携して共同研究
を進めるということをしています。本日は、人文・社会科学について自分
の分野だけじゃなくていろんな視点で今日お伺いできたなど大変興味深く
思いました。

人文・社会科学のコアバリューとは何かと。私は組織の観点からすると、
一つのキーワードは多様性だと思っています。学術の“苗床”を与えている
のは、人文・社会科学、特に人文系だと思っています。理系でも学術は必
要ですが、意外に多様性と幅の広さというのは人文・社会科学でしかでき
ないものがある。

なおかつ私自身は、社会に役に立つか立たないかというのは、あまり重
要な視点では本来ないはずだと思っています。一人の研究者の中で教育も

やる、研究もやる、社会発信もやる、お金もとってくるなんてことはできるわけがないと私は思っています。そういうことを一人の人間に求めること自体に少し無理があるかなと。また、お金をとりやすい分野ととりにくい分野が明らかがあるので、やはりとりやすいところの人がある程度お金を流してやるようなスキームを作らないと、“苗床”というのはどんどん根が細っていくし、本来多様であるべき人文・社会学の裾野の広さというのは、どんどん狭まっていってしまうのではないかと思います。

そうした意味で、本日はしっかりいろんな形の視点でご議論いただいたのが、大変素晴らしいことだと思います。皆さんが各所各所でしっかり組織の中に植え付けていただく、また、こうした場を通じて作っていくのは本当に重要だと感じました。

本日をきっかけにして、ご参加いただいた皆さまの大学機関、人文・社会化研究のさらなる推進に向けた多様な方法論について議論が深まることを祈念して、終わりの挨拶とさせていただきます。

第二部(2024年3月8日)目次

- 1章 「ひみつの研究道具箱 JINSHA ver.」ができるまで
.....p.90
- 2章 「ひみつの研究道具箱 JINSHA ver.」の開催
.....p.97
- 3章 振り返り
.....p.107

1 章 「ひみつの研究道具箱 JINSHA ver.」ができるまで

第9回人文・社会科学系研究推進フォーラムを東京大学が担当すると決まったとき、大役を担えるか緊張しましたが、やりたいと思っていたことを実現する貴重な機会だと思いました。その一つが、2日目の「ひみつの研究道具箱」を使ったワークショップです。

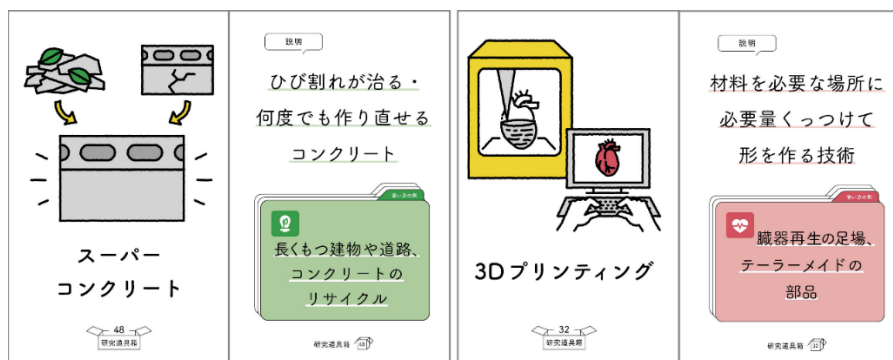
「ひみつの研究道具箱」は、東京大学生産技術研究所・松山准教授が開発された科学コミュニケーションツールで、実は、私自身はそれまでに「ひみつの研究道具箱」を使ったワークショップを体験したことはありませんでした。けれど、東京外国語大学での開催事例 ([思考をなぞることを通した科学コミュニケーションの試み ～カードゲーム「ひみつの研究道具箱」を体験してみよう～](#)) などを見ながら、漠然と、人文・社会科学系分野と理工系分野の間のコミュニケーションに使えるのではないかと思っていました。

なぜなら、うまく言えないけれど、なんだかわくわくするから。この「わくわく」こそが人文・社会科学系分野と理工系分野の対話を進める鍵となる気がするから。その思いをもとに、東京大学の認定 URA メンバーでもある松山さんに思いきって相談を持ち掛けました。そして、松山さんの全面的なご協力のもと、東京大学 URA 有志による試行会を経て、平澤加奈子シニア URA (史料編纂所)、市川美南子 URA (総合文化研究科)、永沼菜未 URA (史料編纂所) もともに検討を進め、「ひみつの研究道具箱 JINSHA ver.」ができあがりました。

報告書第2部は、こうした過程とともに当日の記録をお届けします。

(リサーチ・アドミニストレーター推進室 新澤 裕子)

「ひみつの研究道具箱」は、東京大学生産技術研究所で研究・開発中の科学技術の一部が一覧できる 52 枚のカードと、10 枚の社会課題カード（ピンチカード）で構成されている科学コミュニケーションツールです。工学の非専門家に、萌芽的な科学技術に関して多様な対話を促すことを目的に開発され、研究・開発現場とは接点が少ない人々も参画しやすいよう、情報量や難易度、デザインに配慮されています。



ひみつの研究道具箱のカード例

表面には萌芽的技術の名称とイラストが、裏面にはその技術の概要と用途例が記されている。カードの一覧はウェブサイト「ひみつの研究道具箱」(<https://cardgame.iis.u-tokyo.ac.jp/>) でご覧いただけます。

これまでに 30 を超える場所で、さまざまな対象に向けてさまざまな目的に使用されてきました。当初は、まちづくりのアイデア創出を目的として開発を始めました。地域の住民や地元の高校生が地域の長所や課題を挙げ、それらを活かすあるいは解決する方法を、カードを組合せて検討していくワークショップがその一例です。直近では、RRI (Responsible Research and Innovation: 責任ある研究・イノベーション※) の活動の一環としても活用しています。ワークショップ参加者が、萌芽的技術を組合せて特定の社会課題の解決方法を組み立てる過程で、イノベーションにつながるアイ

デア（技術の新たな価値や ELSI（Ethical, Legal and Social Issues）など）を参加者から回収し、研究・開発現場に届けることを目的とした利用です。

※RRI：萌芽的な技術が将来もたらすであろう影響や、実現が望まれる価値を探索的・予見的に把握し、社会実装に先駆けて対応を進めるために、幅広いステークホルダーに研究・開発のさまざまな過程へ参画を求めること。

今回は、社会課題解決やイノベーション創出に向けて、理工学系の研究と人文・社会科学系の研究とが、どのような場面でどのような連携をとると有効なのか、その接点を探る目的で、新澤さんを筆頭とする東京大学 URA 有志の方々とともに本ツールを使用したワークショップを設計しました。具体的には、特定の社会課題の解決方法を組み立てるカードとして、既存の萌芽的技術カードに2種類のカードを新たに追加することにしました。1つは人文・社会科学系の研究内容を記したカード、もう1つは参加者が制作するオリジナルカードです。研究のトピックス1つ1つの具体性を損なうことなく、研究活動の全体像を俯瞰し、異分野間の連携の可能性を探ることを目指し、まずは萌芽的技術カードのみで課題解決方法を模索し、次に人文・社会系のカードのみで検討し、最後に自作カードも加えてまとめる構成としました。詳細は2章に記載します。

（生産技術研究所 松山 桃世）

① 工学系で考える

技術カードだけで考えるとどうだった？をメモ

A4白紙の上に**技術カード**を配置し、それで何を解決するか(〇〇を解決する、等)を紙に書く

〇〇する

〇〇する

〇〇する

〇〇する

選んだSDGs 目標に向けた「〇〇する」のA4紙の集まり

2つあわせて考えたからこそ、改めて投入したくない新しいカードを加えてもいい

② 人社系で考える

人社カードだけで考えるとどうだった？をメモ

A4白紙の上に**人社カード**を配置し、それで何を解決するか(〇〇を解決する、等)を紙に書く

〇〇する

〇〇する

〇〇する

〇〇する

選んだSDGs 目標に向けた「〇〇する」のA4紙の集まり

③ 2つあわせて考える

①②で考えたA4紙のかたまりで組み合わせたらよさそうなものを考え、そこを核にして工学・人社をあわせて目標達成を考える

1 思考 思考 思考

〇〇する

〇〇する

〇〇する

〇〇する

〇〇する

〇〇する

〇〇する

ファイブバックスできるよね、とか？

2つあわせて考えたからこそ、改めて投入したくない新しいカードを加えてもいい

上述の通り、「ひみつの研究道具箱」は萌芽的技術がカードになったものなので、今回のワークショップ開催にあたり、どのように人文・社会科学系のカード（以下、「JINSHA カード」と記載）を加えるかが一つのポイントになりました。


トランプと同じ 52 枚ある「ひみつの研究道具箱」カードに対し、「JINSHA カード」を作るとしたら何枚で、どんな観点で、どんな内容か……。人社系 URA とは名ばかりの生命科学バックグラウンドの私にとっては、このお題にゼロから取り組むのは無理に思いましたが、3 人の人社系 URA（市川さん、永沼さん、平澤さん）の力を借りて、18 枚のハガキサイズ「JINSHA カード」が完成しました。科研費の審査区分を参照しつつ、学問分野をカードとして扱いやすい粒度で抽出したものになっています。

（リサーチ・アドミニストレーター推進室 新澤 裕子）

<p>思想</p> <p>哲学、倫理学、宗教学、思想史</p> 	<p>定義・主な問い 哲学は、知識とはどのようなものかを追求する「認識論」と、世界を構成しているものは何であるかを扱う「存在論」とがあり、さらに、人はいかに生きるべきか、という実践的な問題に関わる「倫理学」とに大別される。宗教学は、宗教の思想や社会との関係、文化に及ぼした影響などを研究する。</p> <p>主な分析対象・研究例 古代ギリシア哲学、近代哲学、現代哲学、政治哲学、生命倫理、職業倫理</p>	<p>芸術</p> <p>美術・芸術論、美術史、芸術実践論、デザイン学</p> 	<p>定義・主な問い 社会や人間の歴史のなかで創造されてきた「美」に対する意識についての理論と技術を学ぶ。美術は、視覚的・空間的な表現、音楽は聴覚に訴える再生芸術である。</p> <p>主な分析対象・研究例 感性論、音楽論、演劇論、デザイン、建築、アートマネジメント、芸術政策、芸術産業</p>
<p>文学</p> <p>日本文学、中国文学、ヨーロッパ文学、英文学</p> 	<p>定義・主な問い 様々な文学を通して、文学全般を研究する学問であり、文学の表現技法や時代背景、文化などを研究対象とする。</p> <p>主な分析対象・研究例 文学理論、比較文学、文学教育</p>	<p>言語学</p> <p>言語学、日本語学、英語学、日本語教育、外国語教育、図書館情報学、人文社会情報学</p> 	<p>定義・主な問い 人間の言語を研究対象とし、言語の性質や構造、機能、変遷などを研究する。個々の言語の研究を課題とする個別言語学と、言語理論や言語の普遍性、言語類型論などを課題とする一般言語学に分かれる。</p> <p>主な分析対象・研究例 学習者研究、言語習得、教材開発、バイリンガル教育、異文化理解</p>

歴史学

日本史、アジア史、アフリカ史、ヨーロッパ史、アメリカ史




定義・主な問い
史料や史跡から人類の歩みを研究する学問。物理的に戻ることのできない過去の時間について、断片的な事項の把握だけでなく、収集した史料や史跡の探訪・調査などから得た情報をもとに解釈する。

主な分析対象・研究例
交流史、比較史、グローバルヒストリー、環境史、都市史、史料研究

考古学

先史学、歴史考古学、日本考古学、古代文明学




定義・主な問い
いろいろな時代に地球上で暮らし、人々が残した「モノ/資料」により、それぞれの場所と時代の人々の生活・文化・社会などを解明していく学問であり、過去、人類がどのような生活環境におかれていたかを、遺跡や遺物の物質的な面から研究する。

主な分析対象・研究例
物質文化学、実験考古学、情報考古学、埋蔵文化財研究、生態考古学

博物館学・文化財科学

アーカイブズ学




定義・主な問い
博物館学は、博物館を対象とする学問。資料の収集・保存・展示に重点を置き、博物館の組織・運営・機能に関する体系的な科学研究を行う。文化財科学は、文化財に関する自然科学・人文科学両分野の学際的研究。文化財の歴史・芸術的な価値を保存科学の方法で明らかにする。

主な分析対象・研究例
遺跡探査、文化遺産、文化財政策、文化財修復、博物館教育普及、博物館情報メディア、博物館行財政

地理学

地理学、人文地理学




定義・主な問い
世界の国や地域の環境・そこで暮らす人々の生活や文化、社会・経済など自然や文化にわたる諸現象を空間的に分析する。「人文地理学」「自然地理学」「地誌学」の3つの分野がある。

主な分析対象・研究例
土地利用、景観、環境システム、地図学、地域計画、地誌学、地理教育

文化人類学・民俗学

文化人類学、民俗学




定義・主な問い
「文化」という側面からさまざまな異文化社会を観察、分析し、また異文化間相互の比較検討を行うことにより、各文化の固有の体系を相対的に理解し、それに基づいて、そこに暮らす人間について研究する。

主な分析対象・研究例
生徳、物質文化、社会関係、越境、マインリティ

地域研究

アメリカ研究、アジア研究、東欧研究、中東研究、アフリカ研究




定義・主な問い
ある特定の地域に特有の文化や社会、政治・経済の仕組み、人びとの生き方・考え方などをできる限りありのまま把握し、地域固有の論理を抽出することを旨とする学問。

主な分析対象・研究例
援助、社会開発、トランスナショナルリズム、グローバリゼーション、難民、紛争

法学

基礎法学、公法学、国際法学、社会法学、刑事法学、民事法学




定義・主な問い
法や法律の適用や解釈に加えて、法や法律の歴史や社会との関係、特定の法律の背景となった思想や哲学についても研究する。

主な分析対象・研究例
憲法、司法制度、紛争処理法制、労働法、経済法、社会保障法、行政法、租税法、教育法、ジェンダー、法心理学、環境法、国際人権法、国際経済法


政治学

政治学、国際関係論



定義・主な問い
政治現象を研究し、人間と社会の関係を探求することによって、人が社会や組織・集団の中で何を考え、どのように行動するかを検討する学問。政治の歴史を学ぶ「比較政治学」や、国家間の政治を比較する「比較政治学」、国家間の政治的駆け引きや力関係を学ぶ「国際政治学」、行政のしくみを研究する「行政学」などがある。

主な分析対象・研究例
政治参加、地方自治、公共政策、国際関係史、安全保障、グローバルガバナンス、平和構築、紛争処理、国際協力、地域統合、国際機関

<h2 style="text-align: center;">経済学</h2> <p style="text-align: center;">理論経済学、経済思想、 経済統計、経済政策、経済史</p> 	<p style="text-align: center;">定義・主な問い</p> <p>さまざまな価値ある商品を生産するために、社会がどのように限られた資源を使い、異なる集団の間にこれらの商品を配分するか、また、価値とは何かについて研究する学問。モノ・カネ・サービスの流れを研究する学問とも言える。企業や個人、家計の経済活動を見ていく「ミクロ経済学」と国単位の経済全体を取り上げる「マクロ経済学」の2分野がある。</p> <p style="text-align: center;">主な分析対象・研究例</p> <p>ゲーム理論、統計調査、ビッグデータ、社会保障論、国際経済学、開発経済学、環境資源経済学、公共経済学、医療経済学、労働経済学</p>	<h2 style="text-align: center;">経営学</h2> <p style="text-align: center;">公共経済・労働経済、 金融・ファイナンス、 経営学、商学、会計学</p> 	<p style="text-align: center;">定義・主な問い</p> <p>日常生活と密接に関わりのある企業や組織の経済活動の原理や構造、管理方法などを分析することで、企業や組織の運営のあり方を研究する。</p> <p style="text-align: center;">主な分析対象・研究例</p> <p>金融工学、企業論、組織行動論、人的資源管理論、技術・イノベーション経営論、マーケティング論、消費者行動論、財務会計論</p>
<h2 style="text-align: center;">社会学</h2> <p style="text-align: center;">社会学、社会福祉学、 家政学・生活科学</p> 	<p style="text-align: center;">定義・主な問い</p> <p>現代社会が抱える問題や事象を個人の心理や行動の総和としては捉えきれない。社会そのものの性質に注目して分析する。</p> <p style="text-align: center;">主な分析対象・研究例</p> <p>地域社会、家族、労働、階層、文化、メディア、エスニシティ、ジェンダー、アイデンティティ</p>	<h2 style="text-align: center;">教育学</h2> <p style="text-align: center;">教育学、教育社会学、 子ども学・保育学、 初中等/高等教育学、 教育工学、科学教育</p> 	<p style="text-align: center;">定義・主な問い</p> <p>教育を社会や文化の問題として問い直し、教育の目的や本質・方法などを研究する学問。人間の発達と形成についての基本的な理解を深めることから始め、学校教育に限らず家庭や社会における人間教育のあり方についても考えていく。</p> <p style="text-align: center;">主な分析対象・研究例</p> <p>教育制度、比較教育、教育経営、教育社会学、社会化、教育コミュニティ、進路キャリア形成、階層格差、ジェンダー、インクルージョンと共生社会</p>
<h2 style="text-align: center;">心理学</h2> <p style="text-align: center;">社会心理学、教育心理学、 臨床心理学、実験心理学、 認知科学</p> 	<p style="text-align: center;">定義・主な問い</p> <p>人の心を内面・外面から理解しようとする学問。心理学における一般法則を実験を通して明らかにする基礎心理学と、基礎心理学によって得られた知識や法則を実際の問題に役立てることを目的とする応用心理学に分かれる。</p> <p style="text-align: center;">主な分析対象・研究例</p> <p>自己、集団、パーソナリティ、コミュニケーション、学習、犯罪、文化</p>	<h2 style="text-align: center;">ジェンダー</h2> <p style="text-align: center;">ジェンダー研究</p> 	<p style="text-align: center;">定義・主な問い</p> <p>人間を「男」「女」に二分化した上で両者間の序列関係を固定化させるジェンダー概念を、国内外の社会、歴史、文化など多様な領域において研究する。</p> <p style="text-align: center;">主な分析対象・研究例</p> <p>ジェンダー・ポリティクス、フェミニズム、男性学、感情史、セクシュアリティと生殖、ジェンダー表象、クィアスタディーズ</p>

2章 「ひみつの研究道具箱 JINSHA ver.」の開催

1. 背景と目的

現代の社会課題は、気候変動、貧困、教育機会の不平等など多岐にわたります。これらの問題は単一の学問領域だけでは解決が難しく、異なる専門分野の知見を融合させることが求められています。本ワークショップでは、理工学系の技術的アプローチと人文・社会科学系の社会的・文化的視点を組み合わせることで、新しい解決策を見出すことを目的としました。また、その過程で、理工学系の研究と人文・社会科学系の研究との接点を模索し、学際研究支援の糸口をつかむことを目指しました。

2. ワークショップの構成

参加者は8名程度からなる10グループに分かれ、グループごとに以下の内容でワークを進めました。

2.1 イントロダクションとアイスブレイク

最初に互いに自己紹介を行い、ワークショップの趣旨と目的を共有した後、参加者同士の距離を縮めて議論しやすい雰囲気を作るため、アイスブレイクとして、以下のワークを行いました。

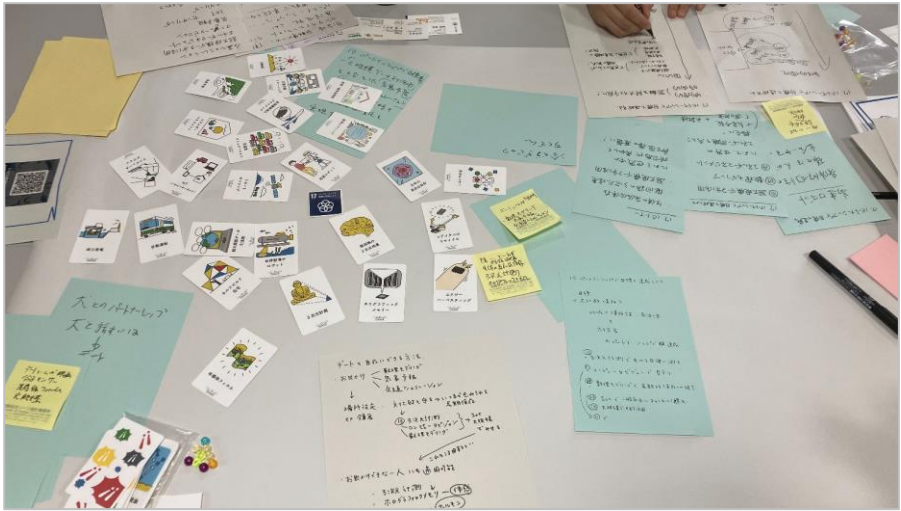
まず、各参加者の手元に5個のビーズが配布され、山札から「ひみつの研究道具箱カード」が8枚、「ピンチカード」が1枚めくられ、机上に並べられました。参加者は任意の枚数の道具箱カードを組み合わせ、ピンチカードに示された具体的な社会課題を解決する方法を考えました。アイデアを思いついた参加者から発表し、他の参加者はそのアイデアを評価し、評価に応じた数の手元のビーズを発表者に渡しました。アイデアが「課題を解決できそう、かつ、まだ世の中になさそう」であれば2個、「課題を解決できそうだがすでに世の中にありそう」であれば1個、「課題を解決できな

そう、あるいは問題が大きそう」であれば0個を提供しました。アイデアが尽きた、あるいは手元のビーズがなくなった参加者が生じた時点でゲームを終了し、ビーズが最も多い参加者を優勝としました。



2.2 課題への対処法を技術(工学系研究の知)の視点から考える

このステップでは、グループごとに1枚のSDGsカードを引いてグループの目標を設定しました。52枚の「ひみつの研究道具箱カード」を机上に広げ、参加者ごとに任意の枚数の道具箱カードを組み合わせ、目標達成に役立つアイデアを書き出しました。アイデアが出揃ったら、順番に発表し合い、協力して似たアイデアをまとめたり、アイデアを組み合わせたり、時系列や具体的な課題、ゴールごとに整理したりといったプロセスを経て、複数の「アイデアの塊」を模造紙上に作成しました。



2.3 課題への対処法を人文・社会科学系研究の知の視点から考える

このステップでは、前のステップで用いた同じ目標に対し、今度は JINSHA カードを用いて人文・社会科学系の知を活かした目標達成に役立つアイデア出しを行いました。同様の流れで、複数の「アイデアの塊」を模造紙上に作成しました。



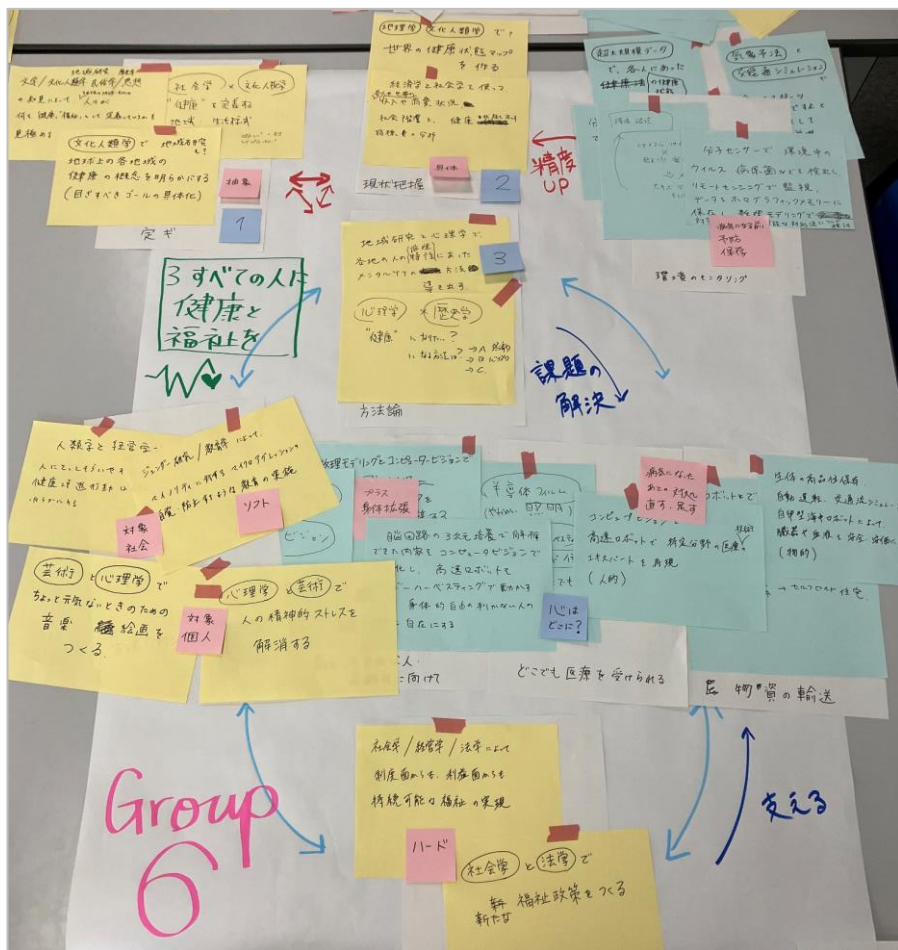
2.4 課題解決をめざし、それぞれの対処法の関係性を考える

このステップでは、これまでのアイデアを模造紙に広げ、理工学視点での「アイデアの塊」と人文・社会科学系視点での「アイデアの塊」の関係性を議論しました。参加者は、模造紙上に矢印などを描き、それぞれの知がどのように連携できるかを可視化しました。



2.5 課題解決に必要な新たな「知」を加える

このステップでは、新たに、各参加者が日常業務で関係している研究を紹介する「推しカード」を加え、目標達成に役立つアイデアを考えました。まず各グループが3つのSDGsカード（「平和と公正をすべての人に」、「住み続けられるまちづくりを」、「気候変動に具体的な対策を」）から1枚を選び、目標を設定しました。各参加者が自作の「推しカード」を順に紹介した後、「ひみつの研究道具箱カード」と「JINSHAカード」に加え、任意のカードを任意の枚数、自由に組み合わせてアイデアを考えました。次に、各自のアイデアを発表し、これまでのセッションと同様のプロセスで、複数の「アイデアの塊」を模造紙上に作成しました。



(Photos: Ayako Yamada, Kanako Hirasawa, and Nami Naganuma)

2.6 全体共有

最後に、グループごとにアイデアを発表し、工学系研究と人文・社会系研究の役割や接点について議論しました。各発表の速記内容は以下のとおりです。

グループ1 SDGs カード「平和と公正をすべての人に」

■人文社会系研究の知の役割・活躍の場

人社がないと流れが作れない

戦争学、古文書、ウェルビーイング・・・最初の分析で使える

ジェンダーとはそもそも何か？を分析

→ 過去はどうだったのか？を調査

→ 対応をどうするか？

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

人社が書いた流れに工学を並べる（シーズがないと工学が並べられない）

人社のマップが必要

人社のリードが平和と戦争の解決に必要な

グループ2 SDGs カード「平和と公正をすべての人に」

■工学系研究の知の役割・活躍の場

各レベルにどう工学が貢献できるか、あてはめていく

異なる民族の相互理解

生活のためのインフラの技術

世界まるごとモデリング

■人文社会系研究の知の役割・活躍の場

定義：平和とは、公正とはなにか

制度：政治学、経済学…

地域を含めた社会

個人のレベル

グループ3 SDGs カード「平和と公正をすべての人に」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

課題解決の整理

1) どこに問題を感じるか

平和・公正の**定義、解決・ゴールのありかた** → 人文学
「平和＝戦争がない」と定義

2) 現状把握

人社：歴史学、文化人類学・・・**時間軸をさかのぼる**

社会学、地域学、ジェンダー

工学：データの把握・・・データ利活用、リモートセンシング

3) 課題設定

4) 解決方法

人社：経済、法律、外交、政治、教育学、心理学、文学・・・**考え方を**変えていく、**合意形成、future design**

工学：格差、人的被害を避ける、怒りの感情の検出

グループ4 SDGs カード「住み続けられるまちづくりを」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

住み続けられるまち＝持続的コミュニティ

1) 文化的なよりどころ

アイデンティティ、楽しみの成立：文化的なことを考える（人社）、
数理モデリング（工学）

2) 仕事ができる

適切な通勤距離：自動運転（工学）、環境整備（人社）

3) まちの構造 耐震構造（工学）

人間の行為をどう物資で支えるか、**人社と工学の差は特に見られない、両者一環で対処していく**

グループ5 SDGs カード「住み続けられるまちづくりを」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

住み続けられるまちとは？

1) まちの強靱性：工学の知

まち・住居の設計：自然環境にやさしい・災害に強い（工学）

維持：多様な背景の人を受け入れる、どういったニーズがあるのか？人が何をまちに求めるのか？（人社）

機能+価値：何に人はひかれるか？（芸術・デザイン）

2) どんなまちだったら住み続けたいか？：人社の知

多様な背景を持った人々

ライフステージの変化

求めるものが変化していく、異なる

土地ごとに特徴もある

対応できる・柔軟に変更するには、工学+人社の知が必要

グループ6 SDGs カード「住み続けられるまちづくりを」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

定義：住み続けられる、住みやすい、とは？・・・人社の知

課題抽出：衣食住が整っている、労働がある、政治に参加できる

課題解決：工学の知

人社：価値観を示す、課題の前提を考える

工学：上記を支える手段

既存の価値観で技術が先行、社会が追いついていない

→ 法整備、価値観に照らし合わせてどう捉えたらいいのか追いかけていく（人社）

グループ7 SDGs カード「住み続けられるまちづくりを」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

1) 個別解決策を考える

工学：耐震設計、自動運転実現に向けたまちづくり

2) そもそも住み続ける必要があるのか？自由に移動してもいいのでは？

先進国の上から目線

3) どうアプローチすればよいのか？

人社：こういうコミュニティであれば多様な人々が生きていける
という**コンセプトの提示、発想の源**

工学：技術があることによってコンセプトが**補完**される、間をつ
なぐ、**発想の足りない部分を補うもの**

グループ8 SDGs カード「気候変動に具体的な対策を」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

1) 技術で関係しそうなものを選ぶ

2) 似たものでまとめた

気候（自然、環境）、都市（社会）、人、物質 → 技術の塊
それぞれが接続している、不可分

3) JINSHA カードを加えていった

地域研究（JINSHA カード）がワイルドカードとして使える
人社ではイノベーションが起こらない？話が落ち着いてしまう、
様々な選択肢を出してしまい結論が出ない

ある段階にならないと、人社の知と工学の知がかみあわない

工学：環境にアプローチしやすい、環境を変える方向に働く

人社：人と社会にアプローチ

グループ9 SDGs カード「気候変動に具体的な対策を」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

技術系での解決策は複数

居住にあった場所を探索して移動

実現するには、地域研究、地理学、民俗学の知が必要

行動させる上で政治学も必要

技術と人社

技術：組み合わせ、スピード重視でできあがっていく

人社：スパンが長くスピードが遅い、**人間の行動を内面から変える**
/外から変える（法律等）

JINSHA カードの粒度：技術との関わりを考えるにはちょうどいい
SDGs の視点が生きてくる

グループ10 SDGs カード「気候変動に具体的な対策を」

■工学系研究の知と人文社会系研究の知の接点

1) 「ジェンダー」を軸に考えた

2) 技術カードがたくさん使える、寄せていった

単体の技術を人々が使うか？—共感、対話（人社の知）が必要

技術で共感も引き起こせるが、それを「編集*」し、「歌舞伎*」で
対話する・共感を得るなど、そこにも人社の知が必要

研究の尖っているところを一般の人に伝えていく URA、「マネジメント*」：つなげていく、が大事

*参加者が制作したオリジナルカード

（生産技術研究所 松山 桃世）

3章 振り返り

ここでは、まずアンケート結果の一部をご紹介します（参加者：54、アンケート回答数：31）。

■ひみつの研究道具箱カードゲームを体験して、いかがでしたか。

とても楽しかった (24)	また体験したい (20)
まあ楽しかった (7)	機会があれば体験してもよい (9)
あまり楽しくなかった (0)	もう体験はしなくてよい (2)
楽しくなかった (0)	二度と体験したくない (0)

■カードゲーム全体:このゲームの良かった点、考えられる応用先・目的などをお聞かせください。

【研究のデザイン】

- ・ 文理融合の研究の brain storming に使える！
- ・ 人社系研究と工学の双方の要素を同時に同じテーブルの上に並べてみることができる、というのが、意外なほどに eye-opening な体験でした。
- ・ 分野を超えて、一つのテーマに対して多角的に解決を試みる経験を共有でき良かったです。これをアカデミアに限らず、様々なステークホルダーとも経験し、新たな産学連携のビジョンを共に描けるようになりたいと思います。
- ・ 多様な背景を持つ参加者とお互いの知見や価値観を照らし合わせることができました（すり合わせ、ではなく）。異分野交流のメインに据えられるアクティビティだったと思います。
- ・ 本学 URA の中で融合研究を考える際に、ぜひブレストのツールとして使ってみたい。

- ・ 理工系研究と人文社会学系研究をどのように社会実装や貢献に向けての共同研究に結び付けられるか、順序をおって論理的に考察できた点と他大学の方々と意見を出し合いながら作業できる点が良かった。学内でも機会があれば、利用したい。
- ・ 「最先端の科学・技術や人社系研究分野には多様性があることへの気づき」、「それらを組み合わせて課題解決に繋げる道筋を考える思考の経験」という点で効果があると思った。
- ・ 自身の URA 業務では、社会学の研究者や NPO から現場課題を聞き、そこから適切なシーズを選択すると社会課題からのバックキャストで文理融合研究プロジェクトを創出・推進することが運よくできたが、その疑似体験を改めてこのカードゲームでできたため、有益なツールと感じました。
- ・ 初対面の背景が異なる人同士でも、最新の科学と社会課題についてディスカッションできるのが良かったです。

【ブレスト、企画】

- ・ 課題探索の援助全般
- ・ 日常的にイメージしない研究も可視化される点。トップダウンでチームングする作業をするとき、案だしに使えると思った。
- ・ テーマ企画にも使える感じがしました。その際に、一旦は規定ものから始めてから、自分達のものを入れてみたり、ないものを自由に発想するとかが使い方になるかもと。
- ・ 産学共創プロジェクトへの活用。初期アイディエーションに活用できる。
- ・ 重要な社会課題に対する、包括的な問題のフレームを構築する時にとても効果を発揮しそう。
- ・ ビジョン共創型の産学連携の最初の部分で社会像やビジョンを共有す

る際に使えると思うし、使ってみたい。

- ・ 共同研究など、複数の研究者が関わる研究において、コンセプトの確認や意識統一が図れると感じた。
- ・ 良かった点：社会課題解決のためのアイデア・シナリオなどについて、多様な考えを引き出すことができる。考えられる応用先・目的：大学や企業での研修、小中高での授業でも活用できると思います。
- ・ 多様な選択肢の中から、目標解決に向けたアイデアを作ることは、柔軟な発想力を養成することができると感じました。バックグラウンドの異なる複数の参加者でアイデアを広げることは、とても良かったです。
- ・ 先入観や既成概念から離れて自由に、技術をどのように活かして社会課題解決の可能性を測るかを考えられる点が良かったです。
- ・ 色々組み合わせることで解決につながることや、その発想に関して他の参加者の意見を聞けるところがよかったです。
- ・ やればやるほど発想力が広がる。ストーリー作りがうまくなる。

【そのほか】

- ・ どちらかというと、未だにやり方を正確に理解できません。この影響で、言えることはあくまでも不完全な理解の基から生まれます。ということは、ある意味では面白いが、カードの色々な中身で、「自由に考えること」は難しくなります。つまり、ゲームの目的は「新しいアイデア」を産むことであれば、中々厳しいです。少しはサイエンスコミュニケーションとして、義務教育中の子供にとって、最も適切かもしれません（「こういう研究はあるけど、この研究はどのようにこの問題を解決するか、どう思いますか？」のような設定）。
- ・ 企業などでも応用できるかと思いました。RRI に貢献できるかも？既にされているとおっしゃっていましたが、教育関連。科学コミュニケ

ーション。

- ・ ほかのゲーム同様、とても良いコミュニケーションのツール。
- ・ みんなでワイワイしながら考える。「協働知」を実感できる。世代を問わず、いろいろな視点から話ができるので、たとえば、大学だけでなく、地域の公民館・老人ホームのようなところや、ボードゲームカフェなどでもイベントできたら面白いのでは。
- ・ URA 等のつなぎ人材が、社会実装に向けたプロセスを学べる点はとても役立つと思った。また、現状の仕事で、不足している点などに気づくことが出来るようにも思う。
- ・ 現在、申請書を書いた後ではなく、申請書を書く前に、何かできないか、という取り組みを行なっています。その取り組みの1つに頭の整理、マインドリフレッシュの効果を狙う為に、WS を開催しております。その手法の1つに取り込めるのではないかと思います。
- ・ 自分とは異なる角度からの意見や発想が新鮮でした。
- ・ 馴染みのない理系の研究分野について考えられたことは、良かった。
- ・ オリジナルカードづくり。
- ・ カードや記入用紙、模造紙、アイスブレイクなど、各参加者の意見を引き出しやすくする工夫が随所に感じられ、とてもすばらしい企画だと思いました。

■今回、「ひみつの研究道具箱」に「JINSHA カード」を組み合わせました。

ワークショップを通して、2つの組み合わせについてどう感じましたか？

意義を感じた (27)

少し意義を感じた (4)

あまり意義を感じなかった (0)

意義を感じなかった (0)

【「意義を感じた」理由】

- ・ アカデミアにおけるニーズは科学技術が先行していますが、二つを組み合わせることで人社系の研究の意義・必要性も感じられたからです。
- ・ オーケストラでいうと、人社研究は指揮者、自然科学研究は演奏者に思え、両方の役割が不可欠なため。
- ・ 今回の粒度と大幅には異なるカードであることを前提すれば、社会実装の足場は元の工具箱自身には備わっておらず、部分的には補完関係をなすため。
- ・ 社会における問題のどれでも、単なる「理工」か「人文」の問題にならず、必ず multi causal です。多様な観点から考察しないと、「解決」だと思ったことで次の問題を起こします。
- ・ 科学技術のカードだけだと、グループのアイデアがどのような社会的問題を引き起こしうるか、そもそもなぜその課題 (SDGs) が社会の問題なのか、の議論が個人の知識に依ってしまうと思われるところを、カードがあることで、思考しやすく、また意見を出しやすくなっていたと思います。
- ・ 人社の観点を入れることで、研究工具箱の議論に幅が出ました。組み合わせることはとても意義があると感じました。
- ・ 人社の考え方を入れる、という部分を加えたことにより、科学技術だけで解決しがたい問題なども、一緒に話していくことができる。新たなアイデアの創成になり得る。
- ・ 科学・技術と人社系研究のどちらかだけでは（もちろんどれかのカード 1 枚だけでも）課題は解決しないということへの気づきを、改めて得られたので。
- ・ 課題の内容によって、人社系サイドからアプローチすると議論が進めやすいものと、工学系サイドからアプローチすると議論が進めやすいものがあったため。

- ・ 最先端の技術だけでは、解決できることは限られると思うから。
- ・ さきほども述べたように、技術だけでは考え付かない解決策があるため。
- ・ 文理融合から総合知などの意義を、実感するに近づけた気がします。
- ・ 文理融合研究に関して、段階的に研究を結びつける考え方のヒントを得ることが出来た。
- ・ 総合知の作り方について、自分なりに理解するヒントをたくさんもらった。
- ・ 社会の縮図の人社カード全てを秩序立てて並べ、技術カードを重ねることに意義がある。
- ・ 自然科学・人文社会科学それぞれを背景に持つメンバーが交じっていたため、思考プロセスの違いなどを感じられて興味深かったため。
- ・ 最初は無理があると思ったが、実際にワークをしてみると課題の全体構造を整理する視点として役に立つとわかった。
- ・ 人社系研究について、理解を深めることができたから。
- ・ 人社系研究やその推進・支援について、多様な考え方に触れることができたから。

■ワークショップを終えた今、ずばり、人社系研究のコアバリューとは何だと思えますか。

- ・ 無意識に前提としていることを問い直せること。課題に対する「アプローチ（方法）」ではなく「方法論」を考えられること。
- ・ 問いを立てること。ビジョンを構想すること。答えがない（一つではない）かもしれない問いに、様々なスケールで取り組み続けること。
- ・ 世界を常に（発展的・批判的に）見直し続けるということ。
- ・ 課題設定力かと思っていたが、それは違うかもしれない。前提を前提でなくする力、前提を否定できる力、かもしれない。

- ・ 新しい視点を提供できること、常識を覆す見方ができること。
- ・ 課題解決のための根本的な部分を考えて、全体の方向性を決められること。
- ・ 課題に対する多様なアプローチの方法を提示できる視野・分野の広さ。課題自体を考える「問い」を立てていくことが可能な学問。
- ・ 目先のことだけでなく、長いスパンで物事を捉えることができること。
- ・ 人社系研究以外の分野とは異なる視点と時間軸。
- ・ 地球上の人類史を自然科学史に乗せて俯瞰した上で課題を解決して行く。人類史は人社系全て。常に全部に課題を照らすことが重要。
- ・ 「過去から未来を含めてマクロからミクロに至る現実社会を深く考えるプロセス」でしょうか。この2日間を通じて、本来は、人社系や自然科学系などは視点の差であって、「〇〇系」という分類の差は目立たない方が良いのだと感じました。URAとしては、この点を理解して研究者間をつなぎ・伝えていきたいと思いました。
- ・ 前ページでも書いたが、やはりピンチが起きたとき、過去の歴史や地域的風土などをもとに課題が何なのかを整理することが出来るのが人社系研究の価値だと思うし、課題解決において社会全体に認知させるため、行動を変容させるために必要な知識についても人社系研究の価値だと思います。
- ・ 繋がりや関係に価値を置くこと。
- ・ 「人」に寄り添った技術の社会実装へと導けること。
- ・ 人間味、人間臭さ、いい感じのお節介。
- ・ 浮標としてのイノベーションを要るだけ繋ぐ社会の錨。いくつも散り散りにあるが良い。
- ・ 倫理とか法律など、理工系分野の開発や発明品の社会実装時には不可欠な要素でそういうところにコアバリューがあるのではないかと思います。一言でずばりと言えずに申し訳ありません。

- ・ 今回は、ずばり、とまではお答えできませんが、どんな広がりも繋がりもありえる、探究心をくすぐらせることができる、工学研究の「知」では解決できない「知」のように感じました。
 - ・ シーズの整理、活用に向けた仕組み作り。
 - ・ 先進技術と人・社会とのつなぎだと思えます。真理の探究や人・社会の発展に向けて不可欠なつなぎ。技術と技術、技術と人、そして人と人とのあいだに人社系研究があるのだと思えます。
 - ・ コアバリューとは、社会の発展に資する価値の創出です。
 - ・ 今回のワークショップについて言えば、大学教職員に、自らも人間集団に生きる一員であることを想起させるところ。
-

アンケートの自由記述から、今回のワークショップの姿が浮き彫りになりました。参加者が評価して下さった点は、大きく以下の4点にまとめられそうです。

1点目は科学技術と社会的視点の融合についてです。例えば「人社系研究と工学の双方の要素を同時に同じテーブルの上に並べてみるができる、というのが、意外なほどに eye-opening な体験でした」など、理工学系と人文・社会科学系の知見や視点を同時に扱う体験を新鮮に感じた参加者が見られ、その上で、「科学・技術と人社系研究のどちらかだけでは（もちろんどれかのカード1枚だけでも）課題は解決しないということへの気づきを、改めて得られたので（意義を感じた）」や「人社の考え方を入れる、という部分を加えたことにより、科学技術だけで解決しがたい問題なども、一緒に話していくことができる。新たなアイデアの創成になり得る」など、双方が組み合わさることの意義を指摘するコメントが並びました。そして、その体験によって「文理融合研究に関して、段階的に研

究を結びつける考え方のヒントを得ることが出来た」、「総合知の作り方について、自分なりに理解するヒントをたくさんもらった」など、総合知の創出の視点から体験を振り返る方もいました。

2点目は柔軟な発想の促進についてです。「多様な選択肢の中から、目標解決に向けたアイデアを作ることは、柔軟な発想力を養成することができると感じました」や、「やればやるほど発想力が広がる。ストーリー作りがうまくなる」など、具体的なトピックスを扱うカードを介することで普段思い至らないアイデアを引き出しやすくなる点を指摘するコメントが見られました。

3点目は参加者の多様さについてです。「一緒にグループワークをした方々がバリエーションがあり、とても話が弾みました！時間もちょうどよい配分で、とても充実した一日でした！」など、人文・社会科学系 URA と一言では括れない、幅広い専門性と業務経験をもつ参加者間での議論だったからこそ、新鮮な視点や学びの深化・発見につながったのではと想像されます。加えて、和やかな雰囲気の中での議論は、ひとえに参加者の人柄・熱意に支えられて実現できたものと感じています。

4点目は今後の参加者の活動への活用についてです。「産学共創プロジェクトへの活用。初期アイディエーションに活用できる」、「課題探索の援助全般として、日常的にイメージしない研究も可視化される点。トップダウンでチーミングする作業をするとき、案だしに使えると思った」など、アイデア出しや社会に存在する包括的な課題探索、教育現場や企業での研修などさまざまな場面で、既成概念にとらわれない発想の創出に有効とのコメントが見られました。ひみつの研究道具箱の活用目的自体も、既成概念にとらわれず、さまざまな方と連携して可能性を拡張していく必要性を

痛感しました。

また、改善点も寄せられました。技術カードの難易度を下げて初心者
に間口を広げる必要性や、基礎科学を加える工夫が指摘される一方で、
JINSHA カードの内容をより具体化・細分化することを求める声もありま
した。ゲームの進行に関しては、自由度の高いワークのため、ファシリテ
ーターが不可欠である点が指摘されました。今回は時間の都合上、ワーク
に加えることができなかつた、ELSI（倫理的・法的・社会的課題）につ
いての議論も行うべきだったとのコメントも複数含まれていました。特に
今回は JINSHA カードを導入したからこそ、深く ELSI を検討できると期
待されるため、残念に感じた方がおられたようです。今後、同様の目的で
ワークショップを実施する際には、ELSI の検討過程も含め、全体のワー
ク内容と時間配分を緻密に設計する必要があります。

今回は、萌芽的な科学技術を紹介するひみつの研究道具箱カードに、
人文・社会科学系のカードを加えて課題解決プロセスを描くという、初め
での試みでした。開発者に豊かな刺激と示唆をもたらして下さったワー
クショップでした。貴重な機会を頂きましたことを、主催者の東京大学リサ
ーチ・アドミニストレーター推進室の皆さま、特に新澤さんと、平澤さん
（史料編纂所）、市川さん（総合文化研究科）、永沼さん（史料編纂所）、
そして参加者の皆さまに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。
皆さまのご活躍を心からお祈り申し上げます。

本ワークショップは、科学研究費助成事業「技術カードを活用した、市民と専門家との「知
の創出・融合」支援手法の開発（基盤研究 C22K02959）」の支援を受けて実施しました。

（生産技術研究所 松山 桃世）

この報告を読んでくださっているあなたは、どんな学術的背景を持ってどんな業務に取り組んでいる方でしょうか。私自身は、生命科学系分野がバックグラウンドで、現在は本部 URA としてさまざまな研究支援に携わっています。そんな私にとって、人文・社会科学系分野は、今まで考えてこなかったこと、ふれてこなかった価値観を知るきっかけを与えてくれました。だからこそ、人文・社会科学系分野の推進に関する議論の際に、URA の間でさえ「これだから理系は分かっていない」といった文 vs 理の対立構造がいつも簡単に描かれることを、しばしば悲しく思っています。

今回、「ひみつの研究道工具箱 JINSHA ver.」の開催にあたって、ゲームとして楽しく取り組むことで、「ひみつの研究道工具箱カード」を使って考えるときは「この技術がこんなことに使えるのではないか」と無邪気に発想を広げる理工系分野の研究者の思考を、「JINSHA カード」を使って考えるときは「そもそもこの課題の背景とは…」と俯瞰・整理する人文・社会科学系分野の研究者の思考を、それぞれ参加者が模擬的に味わえるのではないかと考えました（両者の思考をあまりに単純化しすぎだというお叱りは甘んじて受けるとして…）。それらを通じ、大げさですが、人文・社会科学系分野と理工学系分野の「溝」が（存在するとするならば）、少しでも埋まるといいなと思ったのです。

当日は、私も一参加者として皆さんとともに思考をめぐらせることがとても楽しかったですし、「融合研究を考える際のブレストツールに使える」というアンケートの声が多く寄せられたことは、本ワークショップの成功とともに、松山さんが開発された「ひみつの研究道工具箱」の大きな可能性を示唆していると思います。

改めて本ワークショップ、ならびに第9回人文・社会科学系研究推進フォーラムの開催にあたり、ご協力いただいたすべての方への感謝を込めて。

(リサーチ・アドミニストレーター推進室 新澤 裕子)

人文・社会科学系 URA ネットワーク

(JINSHA:

Japan Inter-Institutional Network for Social Sciences, Humanities and Arts)

構成大学 (2024 年 12 月現在)

大阪大学 経営企画オフィス URA 部門

京都大学 学術研究展開センター

筑波大学 研究戦略イニシアティブ推進機構 研究マネジメント室

琉球大学 研究推進機構研究企画室

早稲田大学 研究戦略センター

北海道大学 統合 URA 本部

横浜国立大学 研究推進機構

中央大学 研究推進支援本部

広島大学 未来共創科学研究本部 研究戦略部 研究戦略推進部門

東北大学 研究推進・支援機構リサーチ・マネジメントセンター

東京大学 リサーチ・アドミニストレーター推進室

新潟大学 経営戦略本部 UA 室

神戸大学 学術研究推進機構 学術研究推進室

JINSHA
Japan Inter-Institutional Network
for Social Sciences, Humanities and Arts

第9回人文・社会科学系研究推進フォーラム 報告書

JINSHA kaleidoscope

一人社系研究のコアバリューを引き出す研究支援のあり方とは—

開催日：2024年3月7日・8日

報告書発行：2024年12月

発行者：東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室

UTRA The University of Tokyo
Research Administrators